

井原市埋蔵文化財発掘調査報告 1

東大谷 1 号墳

消防庁舎移転事業に伴う発掘調査

2003

岡山県井原市教育委員会

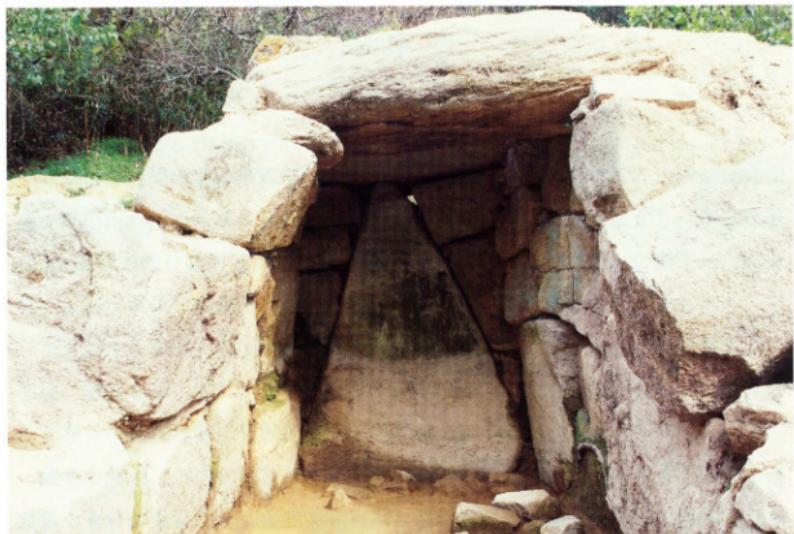
井原市埋蔵文化財発掘調査報告 1

東大谷 1 号墳

消防庁舎移転事業に伴う発掘調査

2 0 0 3

岡山県井原市教育委員会



1 東大谷 1号墳横穴式石室（南から）



2 東大谷 1号墳出土馬具・刀装金具

序

井原市は、岡山県の南西部に位置し、西は広島県に接します。市内のほぼ中央を小田川が西から東へ流れ、北は吉備高原の南端の丘陵が広がり、南は標高100m前後の低丘陵が笠岡まで広がっています。これらの山々に囲まれた本市は、温暖な気候と豊かな自然にはぐくまれ、古くから発展していました。

東大谷1号墳は、当所在地に消防庁舎移転の計画がもちあがり、関係当局と協議、調整を行いましたが、やむなく記録保存のために発掘調査をおこなうこととなり平成10年度に発掘調査を実施しました。

調査の結果、市内では初めての出土となる金銅装馬具や金銅装大刀金具など貴重な資料が発見され、再度関係当局と協議を重ねた結果、現状で保存されることとなりました。

本報告書は、今回、発掘調査した成果をまとめたものです。本書が今後の文化財保護、保存に活用されますとともに、学術研究のための資料として、また郷土の歴史研究の資料として役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査をはじめ、出土品の整理、本書の編集に至るまで、ご指導ご協力を賜りました関係各位に対しまして、衷心より厚くお礼申し上げます。

平成15年3月31日

井原市教育委員会

教育長 三宅 興太郎

例　　言

1. 本書は、井原市教育委員会が消防庁舎移転事業に伴い、井原市の依頼を受け、井原市教育委員会が実施した東大谷1号墳の発掘調査報告書である。
2. 古墳は、井原市七日市町字東大谷3214に所在する。
3. 発掘調査は平成10年8月6日から11月12日まで実施し、整理作業および報告書作成は、平成12年4月1日から平成15年3月31日までおこなった。整理作業にあたっては、玉木秀幸・細羽千枝の協力を得た。
4. 調査は井原市教育委員会文化スポーツ課主任学芸員高田知樹が担当した。
5. 報告書の作成は、井原市教育委員会文化スポーツ課がおこなった。
6. 発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等は、すべて井原市教育委員会文化スポーツ課にて保管している。

凡　　例

1. 報告書に記載された高度値は海拔高であり、方位はいずれも磁北を示す。
2. 本書の第2図に使用した地形図は、芦原市発行の都市計画図25,000分の1地形図を複製し、加筆したものである。
3. 本書の遺構ならびに遺物の実測図の縮尺率については図示または明記しているが、基本的に下記のとおりである。
遺構：墳丘測量図（1／100） 石室実測図（1／60）
遺物：土器（1／3） 金属品（1／2・1／4） 玉類（1／2）
4. 上層断面図等の土色および土器の色調は、「新版標準上色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財團法人日本色彩研究所色票監修）を参考に記述している。
5. 遺物番号のうち、土器以外のものについては材質等により下記に示すように頭に略号を付した。
金属器（M） 玉類（J）
6. 土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのあるものは小破片のため、復元が困難であり、口径の不確かなものである。
7. 遺物名については、壺形土器、壺形土器、高杯形土器などを壺、壺、高杯のように省略して用いる。
8. 写真図版のうち、遺物写真的番号は掲載遺物番号と一致する。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 発掘調査の経緯と経過	4
第1節 発掘調査にいたる経緯	4
第2節 発掘調査の経過	5
第3章 発掘調査の概要	7
第1節 遺 構	7
1 立 地	7
2 墳丘と周溝	8
3 横穴式石室	10
第2節 遺 物	12
1 遺物の出土状況	12
2 土 器	13
3 金 属 器	16
4 玉 類	26
5 鉄 淚	26
第4章 まとめ	29
報告書抄録	32

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1	第11図 遺物出土状況	12
第2図 周辺遺跡分布図	3	第12図 古墳出土須恵器	14
第3図 占墳の位置	4	第13図 古墳出土須恵器・土師器	15
第4図 東大谷1号墳調査前測量図	5	第14図 古墳出土金属器	17
第5図 東大谷1号墳測量図	7	第15図 古墳出土馬具	18
第6図 墳丘北トレント土層断面図	8	第16図 古墳出土鉄鏃（1）	19
第7図 墳丘西トレント土層断面図	9	第17図 古墳出土鉄鏃（2）	20
第8図 墳丘東トレント土層断面図	9	第18図 古墳出土鉄鏃（3）	21
第9図 横穴式石室実測図	10	第19図 古墳出土鉄釘（1）	22
第10図 石室内・石室前方部土層断面図	11	第20図 古墳出土鉄釘（2）	23

第21図 古墳出土鉄釘（3）	24	第23図 古墳出土玉類	26
第22図 古墳出土鉄釘・不明鉄器	25	第24図 鉄釘出土状態	30

図版目次

巻頭図版	1 東大谷1号墳横穴式石室（南から）	2 東大谷1号墳出土馬具・刀装金具
図版1	1 磨査前古墳全景（南から）	2 古墳全景（南から）
	3 石室奥壁（南から）	
図版2	1 石室西側壁（南東から）	2 石室東側壁（南西から）
	3 墳丘東トレンチ上層断面（北東から）	
図版3	1 石室前須恵器出土状況（東から）	2 石室前須恵器出土状況（西から）
	3 石室前遺物出土状況（北東から）	
図版4	1 石室内鉄刀出土状況（東から）	2 石室内雲珠出土状況（南から）
	3 石室内崩尻出土状況（南西から）	
図版5	1 古墳出土土器	
図版6	1 古墳出土金属器	
図版7	1 古墳出土鉄鎌	
図版8	1 古墳出土鉄釘・玉類	

表 図 版

第1表 土器観察表	26
第2表 刀子観察表	27
第3表 鉄鎌観察表	27
第4表 鉄釘観察表	28

第1章 遺跡の位置と環境

東大谷1号墳は、井原市七日市町字東大谷に所在している。

井原市は、岡山県の最西端に位置し、南は笠岡市、西は広島県深安郡神辺町、福山市、北は小田郡美星町、後川郡芳井町、東は小田郡矢掛町に接する。南部は笠岡から広がる標高100m前後の丘陵地帯、北部は吉備高原の南辺部にあたり、その多くが標高200mを超える台地となっている。そのほぼ中央を小田川が沖積平野をつくりながら神戸川、雄神川、稻木川などの支流を合わせて西から東へ流れている。この東西に長い沖積平野と並行するように井原線が走り、人口もこの平野に集中し、都市部を形成している。

本墳は、市の中央部、小田川の沖積平野の南部に広がる標高100m前後の丘陵南斜面の山裾に位置する。すぐ西側を県道笠岡井原線が通っており、笠岡へ行く主要道となっている。

現在までに知られている周囲の遺跡で、旧石器時代、縄文時代のものは確認されていない。弥生時代においても、前期の遺跡は確認されておらず、中期以降の遺跡が知られている。弥生時代中期の遺跡として注目されるのは、六区製表土器出上遺跡（1）、同町の明見銅鐸出土遺跡（2）、十二区製表土器出上した木之子町の猿森銅鐸出土遺跡（3）がある。いずれも標高約100mの同一丘陵上のゆるやかな南斜面より出土しており、特に寺屋敷銅鐸出土遺跡、明見銅鐸出土遺跡は出土位置が50mしか離れていない。近くに集落跡は確認されていないが、付近には弥生時代の散布地（4）が点在するため、今後、発掘調査がすすめば中期の集落跡が確認されるであろう。その他の中期の遺跡になると、上出部町の山王台地上の草足塚東遺跡（5）において土壙墓群が確認されている。後期になると遺跡数が大幅に増加する。このことは、生産量の増加などに伴い、大幅に人口が増大し、集落が拡大したことが予想される。発掘調査した事例でいくと、上出部町の権現平遺跡（6）、草足塚西遺跡（7）があげられる。いずれも、標高120～140mの丘陵上に営まれた集落跡で、堅穴住居や貯蔵穴群が確認された。また、調査されていない遺跡についても、付近の似たような丘陵上に同時期の散布地が点在するため、同様の集落跡の存在が予想される。弥生時代終末期から古墳時代初頭では、笠賀町に所在する金敷寺裏山墳丘墓（8）が注目される。墳丘は長方形で、中央に堅穴式石室をもち、人骨一体が出土した。また、墳丘からは、特殊器台、特殊壺が出土している。

古墳時代に入ると、ほぼ市内全域で古墳がみられる。古墳時代前期は、箱式石棺を持つ小規模なもののが中心ではあるが、東江原町の内挾1号墳（9）は直径が40mを超え、市内最大の円墳となる。また、大江町の石塔山古墳（10）、下出部町の岩崎山3号墳（11）は倉敷考古館によって発掘調査され、いずれも堅穴式石室より人骨及び少量の鉄器が出土している。



第1図 遺跡位置図

横穴式石室をもつ後期古墳も市内全域に広がる。本墳の所在する谷筋には、本墳のほか塙原古墳群、権現平古墳など、石室の奥壁幅1.5mを超える比較的大きな横穴式石室をもつ古墳が集中する。しかしながら発掘調査例が過去ではなく、本墳が初めての調査例となり、貴重な資料を提供した。これらの古墳の被葬者は、この谷筋の南に広がる稻木川流域を拠点にしたと思われるが、今のところ古墳時代の集落跡は確認されていない。

また、本墳は、鉄滓はじめ多くの鉄製品が出土している。本墳の所在する谷筋から南に広がる丘陵の谷あいには、鉄滓が散布する製鉄関連の遺跡が点在し、中には古墳時代のものと想定できる前六方製鉄関連遺跡（12）もあるため、本墳の被葬者とこの製鉄集団が何らかの関わりがあった可能性もある。

古代に入ると、市内のほぼ中央を現在の井原線と同じように東西に山陽道が通る。しかしながらそのルートは特定できず、稻木川のある沖積平野を通っていたという説もある。また、西江原町寺戸には白鳳期に創建されたと伝えられる寺戸庵寺（13）がある。ここからは複弁蓮華文の軒丸瓦が伝わっており、笠岡市閑戸の閑戸庵寺（14）と同型で、隣接した地域での豪族同士の結び付きが考えられる。この寺は、平安時代初頭までの瓦が伝わっており、そのころまで存続していたようである。また、奈良時代以降、密教系の山岳寺院が、市内の小田川によって形成された沖積平野を見渡せる丘陵部を中心に建立される。いずれの寺院も現在まで存続しており、この地域の仏教文化を担っていた。

中世に入ると、山陽道を見渡せる丘陵上を中心に山城が築城され、南北朝の騒乱や戦国時代には文献にも現れ、近世にはいるまで利用されていたようである。また、市内の全域で五輪塔、宝篋印塔が点在しており、土豪層が市域に広く住んでいたことがうかがわれる。

註

- (1) 梅原末治『吉備考古』84号 1952年
- (2) 『岡山県埋蔵文化財報告』25 岡山県教育委員会 1992年
- (3) 錦木義昌『岡山県猿ノ森遺跡』『日本農耕文化の形成』杉原莊介編 1961年
- (4) 『井原市遺跡地図』井原市教育委員会 2001年
- (5) 2001年に発掘調査を実施。
- (6) 2000年に発掘調査を実施。
- (7) 2001年に発掘調査を実施。
- (8) 間堀忠彦・岡壁直子『岡山県井原市金敷寺裏山古墳』『倉敷考古館研究集報』第5号 倉敷考古館 1969年
- (9) 註(4)と同じ
- (10) 錦木義昌『岡山の古墳』岡山文庫4 日本文教出版 1970年
- (11) 間堀忠彦『岡山県下の人骨を出土した古墳六例』『倉敷考古館研究集報』第4号 倉敷考古館 1968年
- (12) 1993年に確認調査を実施し製炭窯を検出。時期のわかる遺物は出土していないが、南側の谷をはさんだ笠岡市側に古墳時代後期の製鉄遺跡、鉄塊遺跡があることから、ほぼこの時期と想定できる。

- (13) 永山卯三郎『岡山県通史』岡山県 1930年
 (14) 安東康宏・岩崎仁司『関戸廃寺』笠岡市教育委員会 1997年



1 東大谷 1号墳	11 権現平古墳群	21 地蔵平遺跡	31 観音面古墳
2 東大谷 2号墳	12 胃岩遺跡	22 権現平古墳	32 高月貝塚
3 金敷寺裏山墳丘墓	13 広沢田（西）遺跡	23 名越遺跡	33 角床遺跡
4 飯山東平古墳	14 山王遺跡	24 後山古墳	34 猿原古墳群
5 飯山古墳	15 菖蒲追古墳	25 後山（西）遺跡	35 東高月古墳群
6 二ツ岩遺跡	16 菖蒲追古墳	26 山間（南）遺跡	36 惣谷遺跡
7 二ツ岩古墳群	17 広沢田（東）遺跡	27 猿森遺跡	37 豊ヶ道古墳群
8 草足塚（西）遺跡	18 塚原古墳群	28 猿森銅鐸出土遺跡	38 砂畠ヶ古墳
9 東足塚（東）遺跡	19 積板遺跡	29 向山東遺跡	
10 権現平（南）遺跡	20 権現平（東）遺跡	30 向山東古墳	

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第2章 調査の経緯と経過

第1節 発掘調査にいたる経緯

平成9年（1997年）、井原市では現在の井原地区消防組合の庁舎が老朽化しているため、県道笠岡井原線と市道日芳橋塚原線の合流地点にあたる、利便性の高い井原市七日市町字東大谷への移転が計画された。この開発区域内には、東大谷1号墳が所在しており、現状で保存できるよう井原市教育委員会と担当部局である井原地区消防組合で事前協議をおこなった。しかしながら、新たに建設する消防庁舎は訓練施設を併設するため現在よりも広い敷地が必要であり、設計変更が困難であるということで、発掘調査による記録保存をおこなうこととなった。

この協議をうけ、井原市より平成10年7月17日付けで埋蔵文化財発掘の通知がされ、7月29日より発掘調査を開始した。



第3図 古墳の位置（1/2,500）

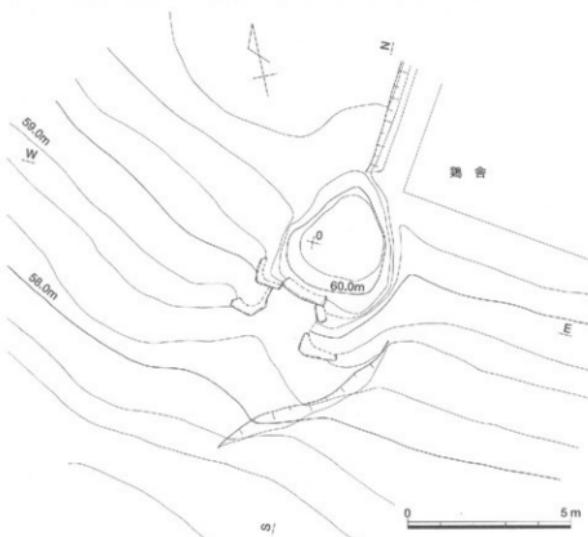
第2節 発掘調査の経過

東大谷1号墳の発掘調査は、平成10年7月29日より着手した。古墳が所在する斜面は、もともと畠地及び果樹園が所在していたが、その後、荒地になっており、また、すぐ北側には鶏舎跡の建物が残っていたため、樹木等の伐採、鶏舎跡の解体から着手した。その後、調査前の写真撮影及び地形測量をおこなった。

古墳の調査は、まず、墳丘の検出を目的として表土の除去から始め、これと並行して、土層を確認するため、墳丘のほぼ中心に、石室の主軸方向とそれに直行する二方向にトレーニングを設定して掘り下げをおこなった。また同時に、石室内の埋土状況を調べるために、石室の中央に主軸方向に沿ってトレーニングを設定し掘り下げた。

トレーニングの結果、墳丘の東部については、後世に削平されており、残存状況は良くなかったが、北西部は、周溝も確認でき、比較的良好に当時の状況を留めていた。また、墳丘の後背部の北側斜面から、墳丘の東側をぐるりと廻り、石室開口部から石室の南西方向に延びる石で築かれた暗渠排水が確認できた。ここからは、近代の陶磁器類が出土しており、近代に古墳後背部の畑の排水路が、古墳の墳丘を迂回するようにして築かれたことが確認できた。また、石室内は、石室の形状から埋土はあまりないと想定して掘り下げていたが、予想以上に石室は埋土で埋まっており、深いところで1m近く堆積していた。埋土中には、近代期の陶磁器、瓦などが流入しており、後世にかく乱をうけていたことが確認できた。このため、石室床面もかく乱を受けており、須恵器など元の位置を保っているものは少なかった。しかしながら、鉄釘、鐵鏃など金属器が比較的良好に元の位置で遺存していた。また、市内初となる金銅装大刀金具や馬具など貴重な資料が出土した。

この結果を受けて、再度開発担当部局である井原地区消防組合と協議した結果、設計を変更し、現状で保存することとなつた。このため、墳丘はトレーニング調査のみをおこなうこととし、墳丘の断ち割りはおこなわなかつた。調査は、予定期間を若干延長し11月12日に終了した。



第4図 東大谷1号墳調査前測量図 (1/150)

調査日誌抄

平成10年

7月29日（木）	機材搬入
8月1日（土）	墳丘・石室測量
3日（月）	調査前写真撮影・測量杭設定
6日（木）	墳丘トレーンチ設定、掘削・表土剥ぎ開始
7日（金）	石室内トレーンチ設定、掘削開始
9月11日（金）	遺物出土状況実測開始
14日（月）	遺物取り上げ開始
11月6日（金）	完掘状況写真撮影
9日（月）	石室実測開始
12日（木）	調査終了

調査・整理の体制

井原市教育委員会

教育長	三宅興太郎
教育次長	山村章志（11年度まで）、西山恒男（12・13年度）、久津間憲通（14年度）

文化スポーツ課

課長	小川智之（10年度まで）、渡辺良信（11年度～14年度）
課長補佐	畠地 泉（11年度まで）、松岡土貢恵（12・13年度）、原田宣典（14年度）
主任学芸員	高田知樹（調査担当）
主事	西本洋子
学芸員（嘱託）	木下秀幸（整理・12・13年度）
臨時職員	谷本有紀（10年度）、細羽千枝（整理・12年度から）
学生アルバイト	松本見典

（調査作業員）

川井 進、川上和男、萩原美雪、原田 哲、三宅勇二、宗高益子、山本則夫

発掘調査にあたっては、岡山県教育庁文化課、岡山県古代吉備文化財センター、倉敷埋蔵文化財センターから多大な援助を受けた。また、下記の方々からは調査全般にわたり有益なご教示、協力を得た。記して感謝します。

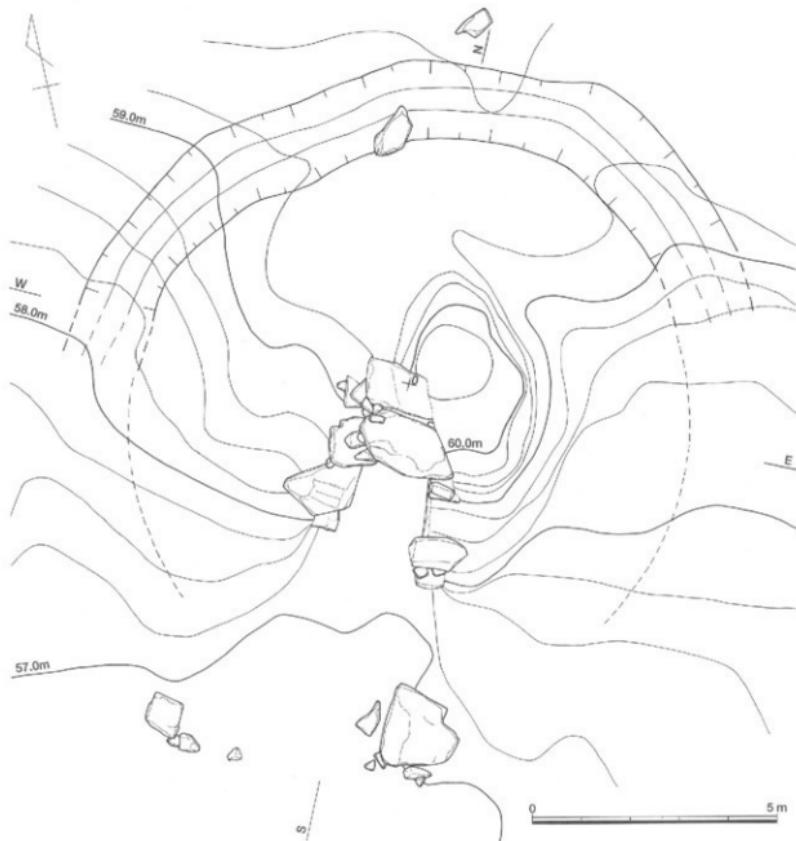
門壁忠彦、亀山行雄、大橋雅也、金田善敬、尾上元規、森 宏之、塩見真康、岡本芳明、岡本伸子、藤原好二、安東康宏（敬称略、順不同）

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺構

1 立地

東大谷1号墳は、井原市の市街地から南に広がる丘陵（標高約105m）の南斜面の山裾に位置する。古墳の北側斜面は近代以降と考えられる畑や鶏舎で地形が改変されており、古墳の周囲も墳丘の中心部分以外は現状の地形を留めていない。また、南側は谷底の低湿地となっており、周囲の山から水が



第5図 東大谷1号墳測量図 (1/100)

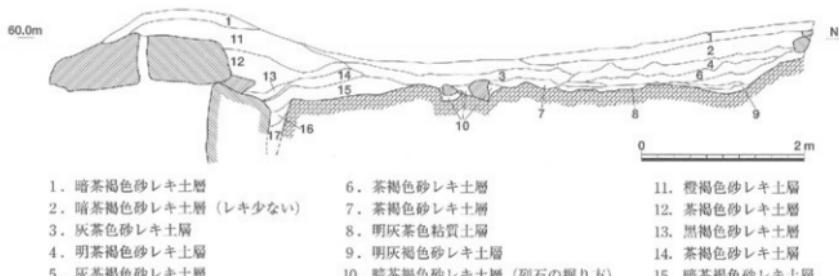
集まるような地形になっている。2号墳は、1号墳の北側約30mのところに位置し、比高差約15mを測る。この谷筋は井原でも前述のとおり、古墳の集中するところであるが、いずれも本墳と同様の立地で南斜面に築かれている。本墳は、残存している天井石の頂部で、標高59mを測る。

2 墳丘と周溝

石室の開口方向を主軸とし、石室後背部の北方向と、主軸と直行するように東西にトレントを設定し、墳丘および石室の掘り方を調査した。但し、本墳は、前述のとおり現状で保存することとなったため、墳丘の断ち割り等はおこなわず、トレント調査のみに留め、石室の掘り方も肩部を確認したのみである。

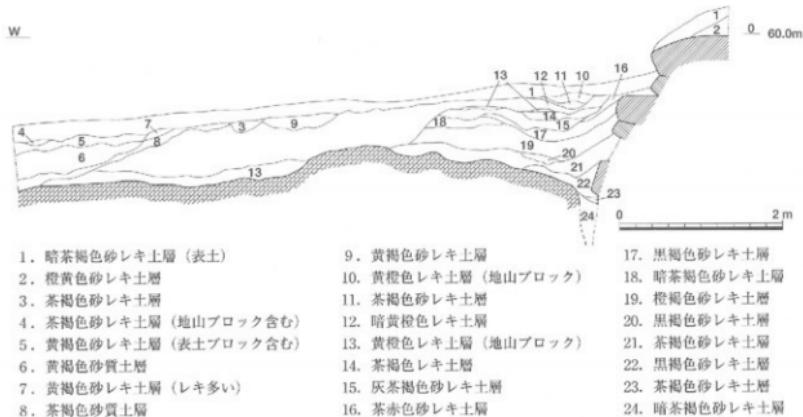
調査の結果、石室の後背部にあたる北側トレントでは、奥壁の石を据えるために地山をほぼ垂直に掘削し、奥壁の石を据えた後は、その隙間を埋めるように数層に渡って埋土を叩き固めているようである。掘り方は、奥壁のほぼ上端部に達していた。墳丘は、その掘り方の上より築かれており土層の厚さは均等ではないが、石室方向にややたわみながら盛土されていた。これは、西側トレントでも同様であり、側壁の石を据えるために地山をほぼ垂直に掘削し、側壁の石を据えていたようである。そして、その隙間を埋めるように数層に渡って埋土を入れている。但し、西側の掘り方は、奥壁側とは異なり、比較的浅いところから地山を掘削しており、比高差は約1.3mを測る。そのため、側壁の1段目の石を据える程度の深さしかない。墳丘は、北側トレントと同じくこの掘り方の上より築かれている。土層の厚さは、10~20cmと均等で、版築状に中央でややたわみながら盛土されていた。東側トレントでは、後世の烟の造成による掘削で墳丘はかなり変更を受けていた。しかしながら、石室の付近では、掘り方、墳丘の一部が残存していた。石室掘り方は、北側、西側とほぼ同様に、地山をほぼ垂直に掘り下げ、側壁の石を据えている。ただし、地山と石室の隙間は、北側、西側が30cm程度であるのに対して50cm以上ある。その隙間を埋めるようにやや下りながら10~20cmの厚さで埋土を入れている。墳丘は、この掘り方上層より築かれている。墳丘の下層では、10~20cmほど均等な厚さで版築状に築いており、上層では、厚さにばらつきがみられ均等ではない。墳丘を構築するにあたっての盛土は、石室掘り方を掘削する際に出た土を使用したようで、第7図第10層・第13層、第8図第25層・第27層のように地山ブロックを含んだり、地山の碎粒と考えられる土層が認められた。

周溝は、墳丘の北側、西側にかけて認められた。北側の周溝は、後世の烟の造成で上部が削平され

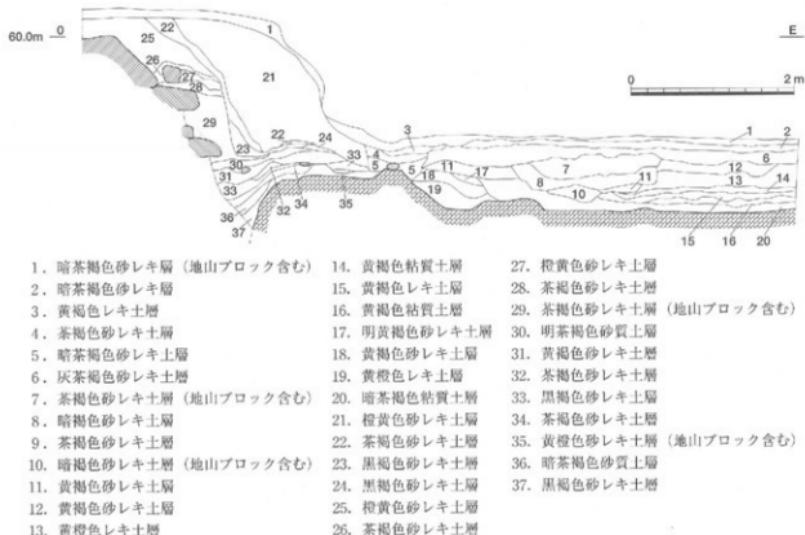


第6図 墳丘北トレント土層断面図（1/60）

ており底部のみが確認できた。地山を掘削して周溝をつくっており、第6図第9層が周溝の埋土になる。検出面で、幅1.5m、深さ20cmを測る。西側では、後世の削平が比較的少なく、周溝の残存状況も比較的良好であった。北側同様地山を掘削して周溝をつくっており、第7図第13層が周溝の埋土になる。山側には明瞭な肩をもたない。検出面で、幅1.5m、深さ30cmを測る。東側では、後世の削平



第7図 墳丘西トレーンチ土層断面図 (1/60)



第8図 墳丘東トレーンチ土層断面図 (1/60)

で周溝は確認できなかったが、西側と同じように廻るものと考えられ、石室を囲むように馬蹄形に周溝がつくりられていたと考えられる。

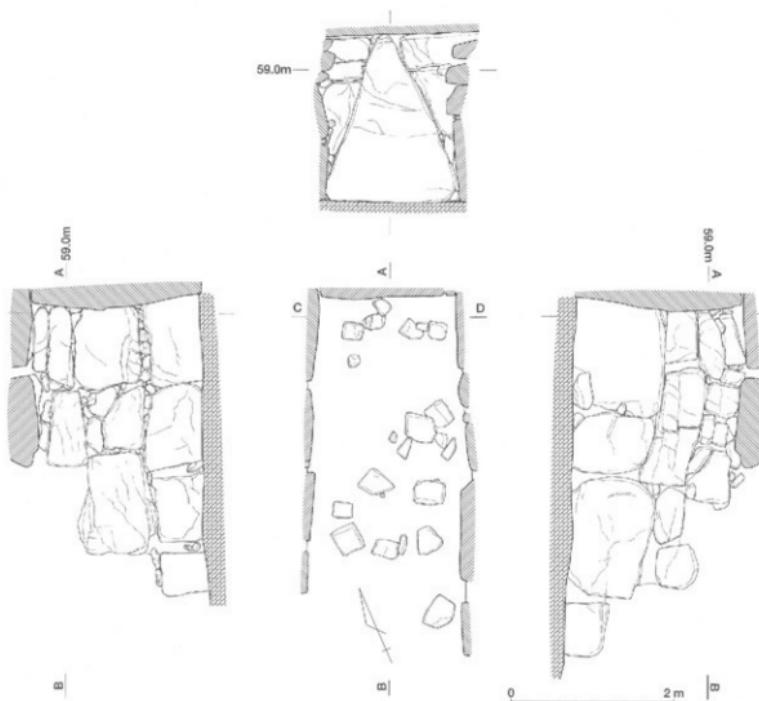
以上の結果より本墳の構築方法は、古墳後背にある丘陵山裾を利用して地山を掘削し、石室掘り方をつくりだし、石材を据えたと考えられる。その後、掘り方の隙間を埋め、掘り方上層より墳丘を築いたと考えられ、墳丘径11.4mを測る円墳であることが確認できた。

3 横穴式石室

横穴式石室の前方部は、破壊されていて石室の全貌は明らかにできなかった。石室の残存状況は、天井石が残っている部分については、構築当初の状況が良好に遺存していたが、石室前方部は、天井石及び最上段の石が抜き取られていた。

天井石は奥から2枚残っていた。扁平であるが加工は施されておらず、自然石を用いている。動かされた形跡はなく、水平に据えられており、構築当初の位置を保っていたと思われる。

石室の全長は、残存する部分で、東側壁で4.45mを測り、西側壁で3.65mを測る。しかしながら、石室前方部は、石材が抜かれている可能性が高く、石室の前方部分に残る石材が側石の一部と考えら



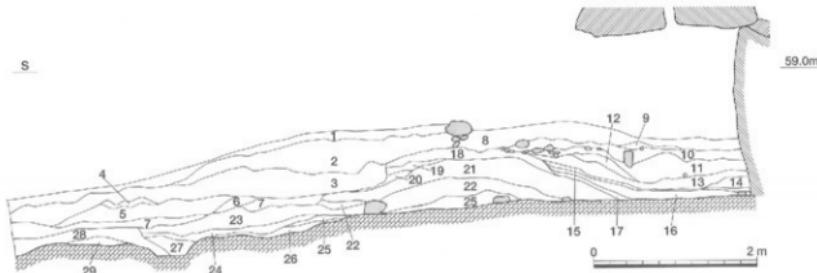
第9図 横穴式石室実測図（1/60）

れる。また、周溝や墳丘の規模を考えると、復元した石室長は、8m程度と考えられる。石室の幅は、奥壁底部で1.7m、奥壁天井部で1.6m、開口部側で1.85mを測る。張り出しまなく、側壁はほぼ直線状に築かれている。奥壁の高さは、2.1mを測る。

石室の構築方法についてみると、奥壁は、大きな二等辺三角形状の自然石を中心にはね、上部の空いた隙間に扁平な石材で、東側を2段、西側を3段に積み上げていくような特異な構造をしている。また、東側壁は、高さ1.1m、幅1.4mの方形の大きな石材を中心に最下段を構築し、その上を2段、扁平な方形の石材で構築している。形状は均等でなく、自然石に近い。また、西側壁は、高さ0.8m、幅1mの方形の石材で構築されている。東側と異なり、比較的整った石材が用いられている。その上2段は、扁平な石材を中心に構築されている。最下段と異なり、石材は整ってはいない。持ち送りはほとんど無く、奥壁の上部と下部との幅の差は10cmしかない。

石室の平面形は、張り出した石も無く、袖石や玄室部と羨道部を区画したような境界線は確認できないため、無袖と推定される。しかしながら、前方部分の石材が抜き取られているため断定はできない。石室の主軸は、MN-25°-Eであった。また、石室の石材は花崗岩で、近くから産出したものと考えられる。

石室の内部は、開口していたにもかかわらず80cm以上の埋土があった。また、石室前方部も1m以上の土砂の堆積があった。石室内の埋土中には、近世以降の磁器や土器の破片が確認でき、後世にかく乱を受けていたと考えられる。埋土を取り除くと石室から崩落した小型の石材のほか、扁平な30~40cm程度の石材が比較的多く検出された。木棺を置く棺台の可能性もある。しかしながら遺体を納めた木棺の痕跡や人骨などは発見されなかった。



- | | | |
|-----------------------------|--------------------|--------------------|
| 1. 暗褐色砂レキ土層 | 10. 黄褐色砂レキ土層（レキ多い） | 20. 暗茶褐色砂レキ土層 |
| 2. 明茶褐色砂レキ土層 | 11. 黄褐色砂質土層 | 21. 黄褐色砂レキ土層 |
| 3. 橙茶褐色砂レキ土層
(茶褐色ブロック含む) | 12. 黄褐色砂レキ土層（レキ多い） | 22. 暗褐色砂レキ土層 |
| 4. 橙茶褐色砂レキ土層 | 13. 暗黄褐色砂質土層 | 23. 黄褐色砂レキ土層（レキ多い） |
| 5. 暗橙茶褐色砂レキ土層 | 14. 黄褐色粘土層（砂まじり） | 24. 暗茶褐色砂レキ土層 |
| 6. 茶褐色砂レキ土層 | 15. 暗茶褐色砂レキ土層 | 25. 黄褐色砂レキ土層 |
| 7. 黄褐色砂レキ土層（レキ多い） | 16. 暗黄褐色砂レキ土層 | 26. 黄褐色砂レキ土層 |
| 8. 黒暗褐色砂レキ土層 | 17. 暗茶褐色砂レキ土層 | 27. 赤褐色砂レキ土層 |
| 9. 黄褐色砂レキ土層 | 18. 暗黄褐色砂レキ土層 | 28. 黑褐色砂レキ土層 |
| | 19. 茶褐色砂レキ土層 | 29. 茶褐色砂レキ土層 |

第10図 石室内・石室前方部土層断面図（1/60）

第2節 遺 物

1 遺物の出土状況

古墳から出土した遺物としては須恵器、土師器、鉄刀・刀子・馬具・鉄鎌・鉄釘等の鉄器、ガラス玉、切子玉、耳環、鉄滓等がある。石室の前方部は後世の烟の造成等に伴い破壊されている。また、須恵器は、杯の形式から時期差がいくらかあるが、出土地点にまとまりがみられず、石室の内部も後世のかく乱を受けている。そのため検出された遺物の多くは、元の位置を保っていない。

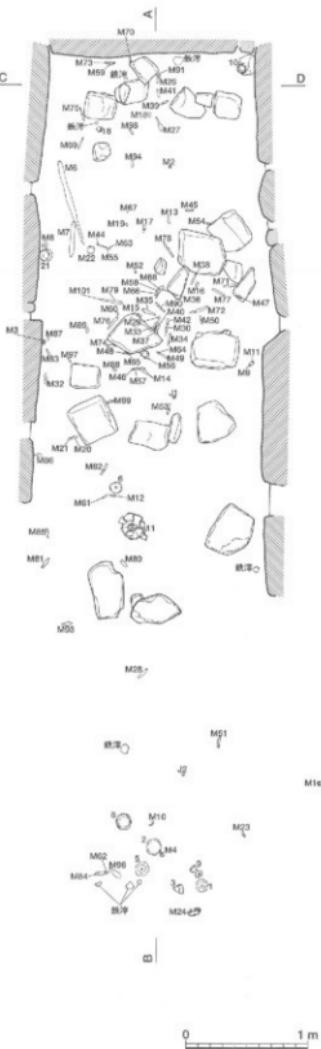
石室床面に作ると思われる遺物としては、須恵器の提瓶・平瓶、土師器の椀、鉄刀・鉄鎌・鉄釘等の鉄器が検出されている。

須恵器の提瓶(10)は石室北東部隅に口を上に向けるほぼ完形の状態で検出された。平瓶(11)は、石室の前部中央で、口を上に向ける土圧でつぶれた状態で検出されている。土師器の椀(21)も口を上に向ける状態で、石室の中央西端で検出された。鉄刀は、石室北西部より大小2点、側壁と並行に検出された。鉄鎌、鉄釘はほぼ石室全域で検出された。特に、鉄釘は、石室奥壁近くと石室中央部分で多く出土している。鉄釘の数から、木棺が複数あったと思われるが、全ての木棺の位置を復元するのは難しい。

また、石室前方部にも、須恵器を中心にして遺物のまとまりがあるが、これは、後世のかく乱または追葬の際に、この場所にかき出された可能性がある。

耳環、ガラス玉、切子玉などの副葬品は、いずれもまばらに点在しているため元の位置を保っていない。

以上のように、石室は須恵器を中心にかく乱を受けしており、須恵器の出土量は、石室の規模に比べて少ないと思われる。しかしながら、金属器は、鉄鎌、鉄釘を中心にして107点を数え、かく乱を受けている割には遺存していた。また、須恵器の各器種や馬具、金銅装大刀金具なども出土しており、古墳の年代や被葬者の性格を考える上で手がかりにはなりうると思われる。



第11図 遺物出土状況 (1/40)

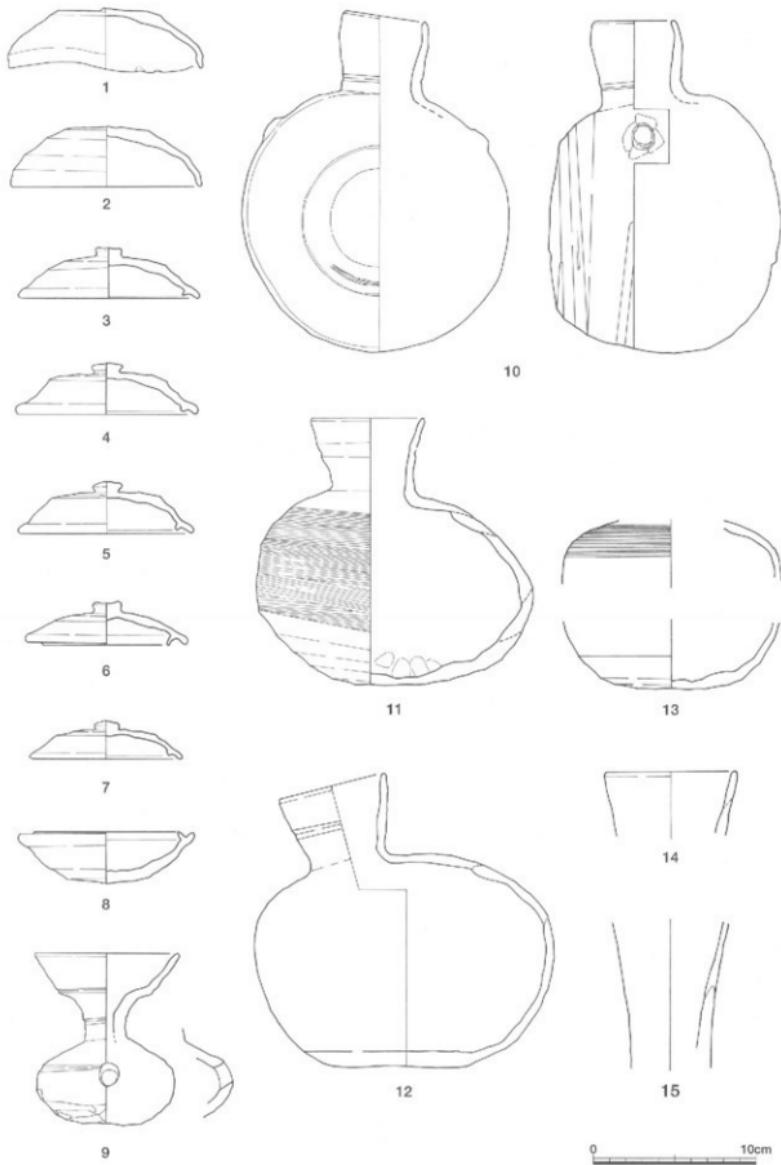
2 土 器

a 須恵器 (1~20)

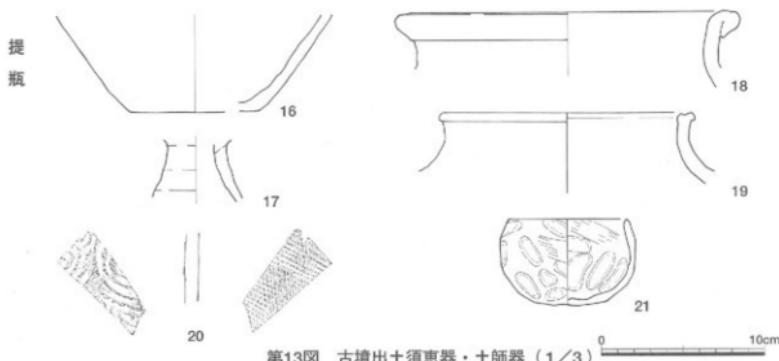
・**杯蓋 (1~7)** 1・2・5・6・7は完形で、焼成は3・4・5・7が不良である。3・4・5・6・7には、つまみとかえりが付いている。1は、口径119.5mm、器高38mmを測り、口縁の一部に歪みがみられる。調整は上部をヘラオコシ、内外面をロクロナデしている。天井部は、ヘラギリをおこない、調整は施していない。胎土は0.5mm大の黒点を含み、色調は、外面が灰白色、内面が明青灰色を呈している。2は、口径118.5mm、器高37mmを測る。調整は上部をヘラオコシ、内外面をロクロナデしている。天井部は、ヘラギリをおこない、調整は施していない。胎土は0.5mm大の黒点・白色砂粒を含み、色調は、外面が明青灰色、内面が明青灰色を呈している。3は、口径110mm、器高31.5mmを測る。つまみは、高さ5mmを測り、扁平な形をしている。かえりは3mmと短い。調整は、上部をヘラケズリし、つまみ部分は接合ナデを施している。天井部の内面には、一定方向に仕上げナデが施されている。胎土は0.5mm大の白色砂粒・黒雲母を多く含み、色調は、外面が灰白色、内面が灰白色を呈している。4は、口径110mm、器高32mmを測る。つまみは、高さ6mmを測り、扁平な形をしている。かえりは2mmと短い。調整は、上部をヘラケズリし、つまみ部分は接合ナデを施している。天井部の内面には、不定方向に仕上げナデが施されている。胎土は3mm大の白色砂粒・石英を多く含み、色調は、外面が黄灰色、内面が灰白色を呈している。5は、口径108mm、器高32.5mmを測る。つまみは、高さ6mmを測り、中央がやや盛り上がった扁平な形をしている。かえりは2mmと短い。調整は、上部をヘラケズリし、つまみ部分は接合ナデを施している。天井部の内面には、不定方向に仕上げナデが施されている。胎土は3mm大の白色砂粒・石英を含み、色調は、外面が灰白色、内面が灰白色を呈している。6は、口径98mm、器高27mmを測る。つまみは、高さ6mmを測り、中央がやくほんだ扁平な形をしている。かえりは6.5mmを測る。調整は、上部を回転ケズリし、外面下部、内面全体はヨコナデを、つまみ部分は接合ナデを施している。天井部から口縁部にかけて全体の1/3の部分に暗オリーブ色のゴマがかかる。胎土は2mm大の白色砂粒・黒点を含み、色調は、外面が灰白色、内面が灰白色を呈している。7は、口径93mm、器高24mmを測る。つまみは、高さ6mmを測り、中央がやや盛り上がった扁平な形をしている。かえりは2mmと短い。調整は、上部をヘラケズリし、つまみ部分は接合仕上げナデを施している。天井部内面には不定方向に仕上げナデが施されている。胎土は2mm大の白色砂粒・黒点を含み、色調は、外面が灰白色、内面が灰白色を呈している。

杯身 (8) 完形で、焼成は良好である。口径90mm、器高32mmを測り、5mmを測る短い立ち上がりをもつ受部がある。調整は下部をヘラオコシ、内外面をヨコナデしている。底部は、仕上げナデを施している。胎土は0.5mm大の白色砂粒を少量含み、色調は、外面が青灰色、内面が青灰色を呈している。

鰐 (9) 完形で、焼成は良好である。口径88mm、器高107mmを測る。調整は、口縁部内外面及び胴部中央までヨコナデを施し、底部は、ヘラケズリを施している。穿孔は、胴部中央に斜め方向から外面よりおこない、切り離した粘土塊が器内に残存する。口縁部の屈曲部分と胴部中央に1条づつ沈線を施している。胎土は2mm大の白色砂粒を含み、色調は、外面が灰色、内面が灰色を呈している。



第12図 古墳出土須恵器 (1/3)



第13図 古墳出土須恵器・土師器 (1/3)

(10) 口縁部が少し欠けているがほぼ完形で、焼成は良好である。口径48mm、器高210mm、最大胴部径166mmを測る。頸部に沈線を1条、口縁にかけてロクロナデを施している。胴部は、扁平な側は、ヘラケズリを施し、ふくらみをもつ側は、中央に沈線を1条、その内側にカキメを施している。肩部には、ボタン状の装飾を貼り付けている。胎土は1mm大の白色砂粒を含み、色調は、外面が灰白色、内面が灰色を呈している。

平瓶 (11~13) 11は完形で、焼成は12が不良である。11は、口径69mm、器高166mmを測る。叩きしみがしっかりとおこなわれていないため、空気が膨張し、底部を中心に器壁がふくらんでいる部分がいくつかある。表面全体に青黒色の釉がかかり、胴部には壺片が付着している。調整は、口縁部から肩部にかけてロクロナデを施し、胴部中央は、カキメを施している。底部は、回転ヘラケズリを施している。内側は、ほぼ全体にロクロナデが施され、頸部と胴部の接合部分には指紋痕、底部には指おさえ痕跡が残る。胎土は1mm大の白色砂流・黒点を含み、色調は、外面が青黒色、内面が暗青灰色を呈している。12は、口径66mm、器高182mmを測る。調整は、口縁部から胴部のはば全体にロクロナデが施され、底部は、強いロクロナデを施した後、格子のタタキメが施されている。頸部には、沈線が1条施されている。内側は、ほぼ全体にロクロナデが施され、底部は、不定方向の仕上げナデが施されている。胎土は0.5mm大の長石・石英を少量含み、色調は、外面が灰白色、内面が灰白色を呈している。13は、胴部のみである。調整は、肩部にカキメを施し、胴部にかけては、ロクロナデ、底部はヘラケズリを施している。内側は、ほぼ全体にロクロナデが施されている。胎土は0.5mm大の長石・石英を少量含み、色調は、外面が青灰色、内面が青灰色を呈している。

長頸壺 (14~16) いずれも破片である。焼成はすべて良好である。14は、口縁部の破片で、口径80mmを測る。調整は、内外面ともロクロナデが施されている。胎土は1mm大の石英、長石、黒点を少し含み、色調は、外面が浅黄色、内面が灰白色を呈している。15は、頸部の破片で、調整は、内外面ともロクロナデが施されている。胎土は0.5mm大の白色砂粒を少し含む。色調は、外面が灰白色、内面が灰白色を呈している。16は、底部の破片である。調整は、内外面ともロクロナデが施されている。胎土は0.5mm大の白色砂粒を少し含み、色調は、外面が青灰色、内面が灰白色を呈している。出土地点は、いずれも石室前方部であり、色調・胎土が似ていることから同一固体の可能性もある。

高杯（17） 脚部上部の破片である。焼成は良好で、調整は、内外面ともロクロナデが施されている。胎土は1mm大の石英、黒点を少し含む。色調は、外面が灰白色、内面が灰色を呈している。

甕（18・19・20） いずれも破片である。焼成はすべて良好である。18は、口縁部の破片で、口径198mmを測り、表面全体に青黒色の釉がかかっている。口縁部は、垂直に立ち上がり、調整は、内外面ともヨコナデが施されている。胎土は1mm大の白色砂粒少し含み、色調は、外面が青黒色、内面が青黒色を呈している。19は、口縁部の破片で、口径156mmを測り、表面全体に青黒色の釉がかかっている。口縁部は、ややハの字にひらいて立ち上がり、調整は、内外面ともヨコナデが施されている。胎土は0.5mm大の白色砂粒少し含み、色調は、外面が紫黒色、内面が灰白色を呈している。20は、胴部の破片である。胴部の破片は他にも数点出土しているが、20は、内面に、同心円文タタキメの中心に星形を刻んだ、いわゆる車輪文タタキメを施している。出土位置も、墳丘内より出土しており、石室の副葬品ではない。外面は、平行タタキメの後、カキメによって調整されている。胎土は、0.5mm大の白色砂粒を少し含み、色調は、外面が青灰色、内面が暗青灰色を呈している。

b 土師器（21）

椀（21） 完形の手づくねの土師器の椀である。焼成は不良で、口径94mm、器高54mmを測る。調整は、全面を指揮されて成形している。色調は、内外面とも橙色を呈している。

3 金属器

a 耳環（M1～M5）

5点が出土している。M1・M2・M4・M5は、ほぼ同じ大きさで2対ある可能性がある。M3は、他の4点に比べると断面径が小さい。

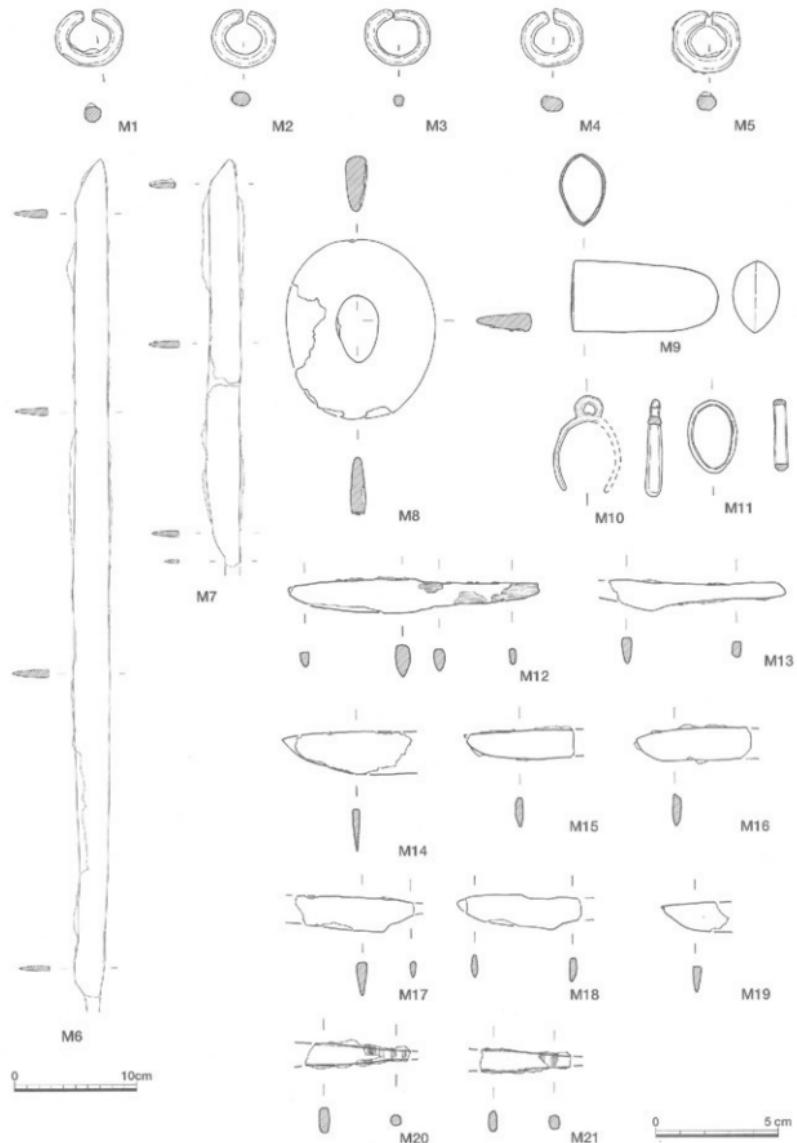
M1は、外径23.5×27.5mmを測り、楕円形を呈している。断面径は、短径6mm、長径6.5mmを測り、円形を呈している。表面にはかなり緑青がみられる。重量は、10.6gである。M2は、外径23.5×26mmを測り、楕円形を呈している。断面径は、短径6.5mm、長径8mmを測り、楕円形を呈している。銅地金張りで鍍金が一部残存している。重量は、12.2gである。M3は、外径22.5×26.5mmを測り、楕円形を呈している。断面径は、短径6.5mm、長径8mmを測り、楕円形を呈している。表面にはかなり緑青がみられる。重量は、3.4gである。M4は、外径24×25mmを測り、円形を呈している。断面径は、短径6mm、長径9mmを測り、楕円形を呈している。銅地金張りで鍍金が一部残存している。重量は、12.0gである。M5は、外径25.5×27mmを測り、楕円形を呈している。断面径は、短径6mm、長径9mmを測り、楕円形を呈している。重量は、15.1gである。

b 鉄刀（M6・M7）

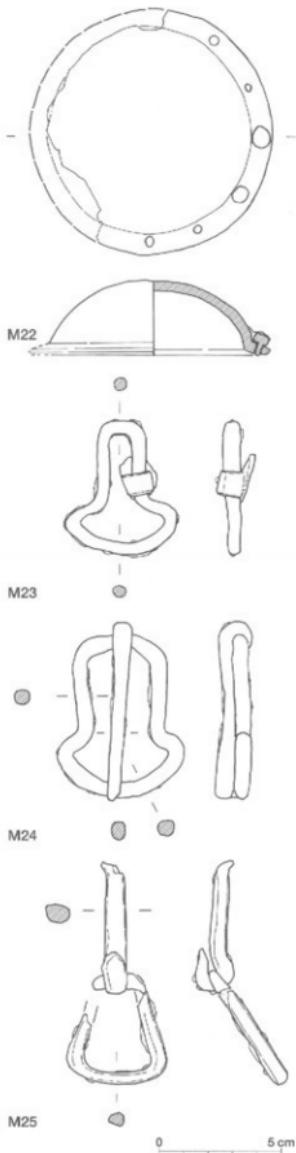
大小2点が出土している。出土位置が近く、共に石室側壁に並行な状態で検出されたため埋葬時の状態のままであると思われる。M6は、茎部が欠損しているため全長は不明であるが、現存長688.5mm、刀身長685mm、茎長3.5mm、刀身最大幅30mm、棟幅7mmを測る。錆化が著しく、刃部が欠けている部分もある。M7は、刀身部中央及び茎部が欠損しているため全長は不明であるが、現存長333mm、刀身長325mm、茎長8mm、刀身最大幅28mm、棟幅5mmを測る。錆化が著しく刃部が欠けている部分もある。

c 刀装具（M8～M11）

M8は、ほぼ完形の鷹である。M6・M7のすぐ近くから出土しており、円孔の大きさからもこの



第14図 古墳出土金属器 (1/2・1/4)



第15図 古墳出土馬具 (1/2)

どちらかの銅である可能性がある。鋸でかなり劣化しているが、楕円形を呈しており、長径74mm、短径60.5mm、円孔径 27.5×16.5 mm、最大断面幅9mmを測る。象嵌等は認められなかった。M9は、完形の鞘尻である。青銅製で鍛金がほぼ全面に遺存している。全長59.5mm、長径29.5mm、短径18mmを測る。前述の鉄刀の幅より長径がやや小さいためこれらの鞘尻である可能性は低い。M10は、足金具である。ほぼ半分が残っており、青銅製で鍛金がほぼ全面に遺存している。残存長39mm、吊手孔は 5×3.5 mmを測る。M11は、完形の資金具である。青銅製で鍛金がほぼ全面に遺存している。長径30mm、短径20mmを測る。M9の鞘尻と同じところで検出されたため同一の大刀金具と思われる。

d 刀子 (M12～M21)

10点が出土している。M12のみ完形で残りはすべて破片である。M12は、全長102mm、刀身長53mm、刀身幅13.5mm、棟幅6mm、茎長49mmを測る。茎部には柄と思われる木質痕が残る。M13は、刀身部が欠けている。残存長72.5mm、刀身長24.5mm、刀身幅11mm、棟幅3.5mm、茎長48mmを測る。M14～M16・M19は、刀身部の破片である。M17は、刀身部及び茎部が欠けている。残存長47mm、刀身長40mm、刀身幅13mm、棟幅3mm、茎長7mmを測る。M18は、茎部が欠けている。残存長48mm、刀身長38mm、刀身幅13.5mm、棟幅4mm、茎長10mmを測る。M20・M21は、茎部の破片である。ともに茎の一部に糸巻き痕が残る。

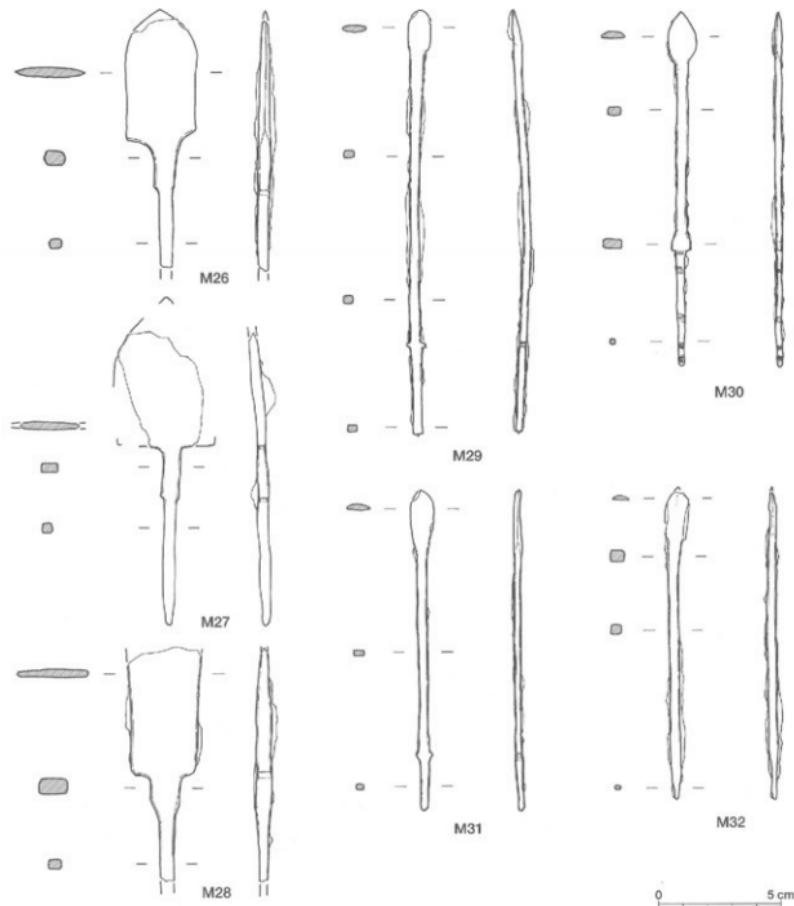
e 馬具 (M22～M25)

4点が出土している。M22は、雲珠である。鉄地金銅張製ではば完形である。金張が一部遺存している。半球状を呈しており、直径100mm、高さ30.5mmを測る。脚はなく、半球の縁の幅8mmの部分に鍛が付く形態である。鍛は、頭が丸く、2個残っているが、復元すると鍛は12個あったと考えられる。M23・M24は銃具である。輪金で鉄製である。M23は、全長55mm、基部幅20mm、環部幅45.5mm、軸は円形で径65mmを測り、座金の一部が残る。M24は、全長72.5mm、基部幅39mm、環部幅52mm、軸径7mmを測る。軸は、環部が円形、基部が方形を呈している。中央に刺金があり、長さ72.5mm、軸径6.5mmを測る。M25は、鞍である。輪金で鉄製である。2つの破片からなるが、復元長91.5mm、最大幅40mm、軸径6mmを測る。輪金は、下部にかけて広がる

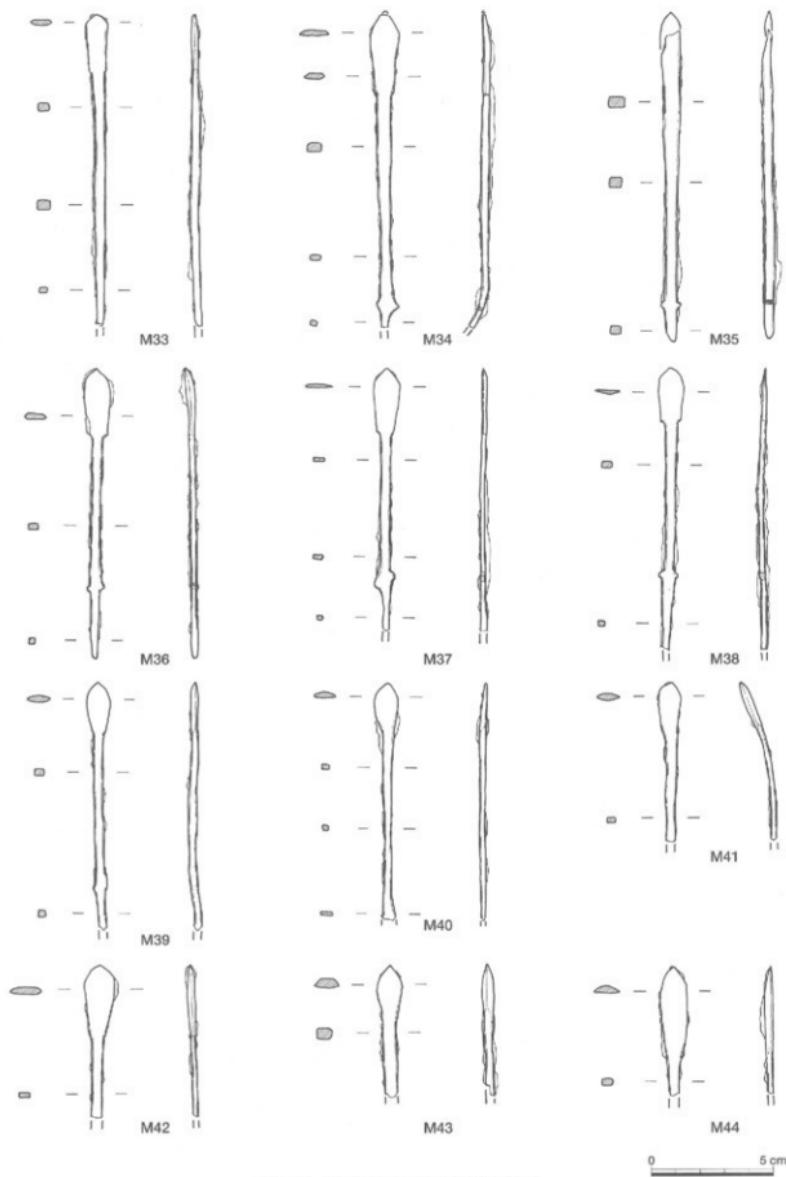
形状をしている。脚部が遺存しており、残存長5.4mm、軸径9mmを測る。

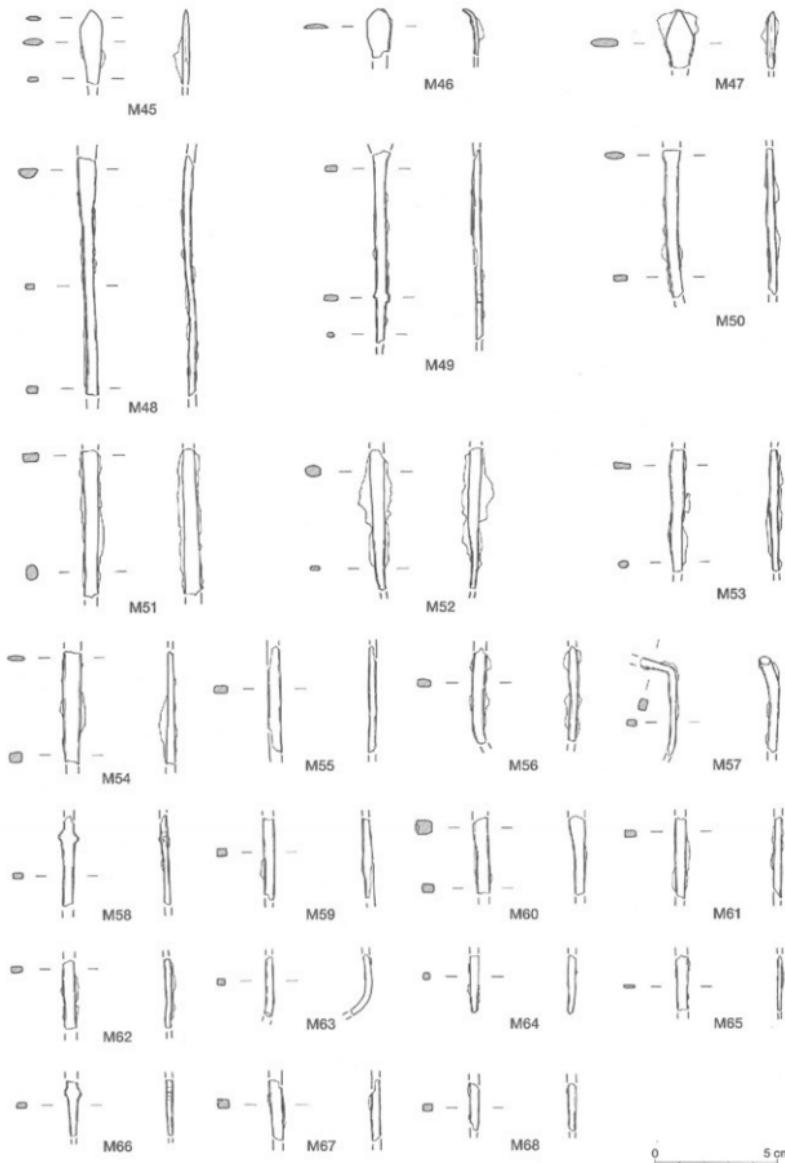
f 鉄鎌 (M26～M68)

43点が出土している。石室床面より出土しているものが多く、特に、石室奥壁付近及び中央部で多く検出された。M26～M28は、平根式の鎌である。M26・M27は、柳葉式で鎌身間に段が付く形状である。M28は、鎌身の先端部が欠けているが方頭式と考えられ、鎌身間に段が付く形状である。M29～M47は、細根式柳葉式の鎌である。M29～M31・M33～M40は、棘状突起をもつ。M29～M31は、完形である。最長のもので、全長174mmを測る。M30は、茎部に糸巻きの痕跡が残る。鎌身の形状は、頭部に段を有するものと有しないものの2種類の形状が認められた。M48～M68は、



第16図 古墳出土鉄鎌 (1) (1/2)





第18図 古墳出土鉄鏡 (3) (1/2)

鐵身部が欠損しているため形状が不明であるが、頭部の幅などから大部分は、細根式柳葉式の鎌と考えられる。

g 鉄釘 (M69～M101)

33点が出土している。石室床面より出土しているものが多く、ほぼ石室全面で検出された。また、多くの釘からは木棺の痕跡である木質が付着している。釘は、頭部の形状から大きく3種類に分類できる。M69～M79は、頭部を丸く膨らませた形状を呈しており、全長が145～123mmと比較的大形のものが多い。断面も正方形に近い方形を呈しており、石室奥壁付近及び中央部で検出された。M80～M89は、頭部の先端部分を欠損しているものが多いが、頭部を直線的に処理した形状を呈している。全長は、完形のものが少ないが、100mm以下のものが中心となる。断面は、長方形のものが多く扁平な形状を呈しており、石室中央部の西壁付近で検出された。M90～M94は、頭部を直角に折り曲げた形状を呈している。その頭部の形状は扁平で、正方形に近い形状を呈している。全長は、完形のものが少ないが、100mm以下のものが中心となる。断面は、長方形のものが多く扁平な形状を呈している。剖面的には、この形状のものが一番少なく、石室のほぼ全面より検出された。

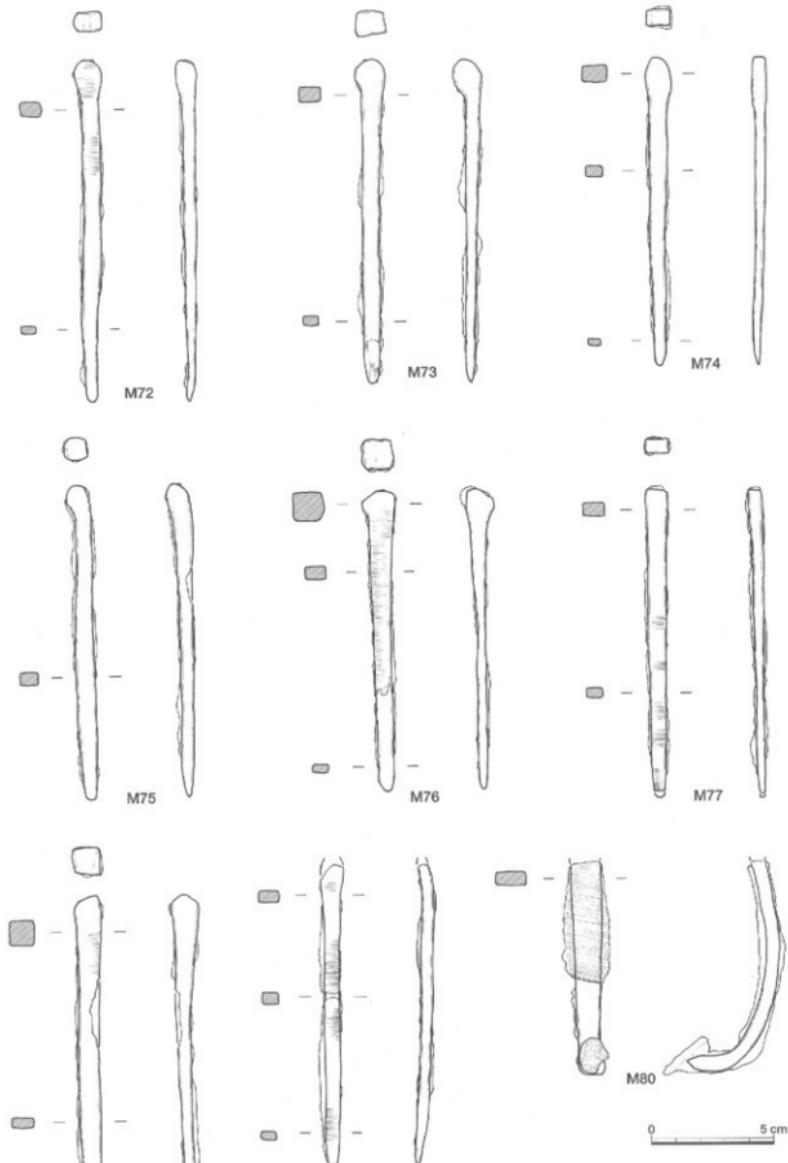
h 不明鉄器 (M102～M107)

M102は、全長144mm、板状の鉄製品である。刃のようなものはついておらず、木棺を留める鎌のような棺材の一部であると考えられる。M103は、残存長41.5mm、板状の鉄製品である。刃の痕跡が認められるため、刀または鎌のような農具の可能性がある。M104は、残存長28mm、鉄鎌または鉄釘の一部と考えられる。M105は、残存長18.5mm、板状の鉄製品である。端を折り曲げるよう加工しているが、用途は不明である。M106は、残存長20mm、湾曲した板状の鉄製品である。刀または刀子の鞘の一部の可能性がある。M107は、残存長27.5mm、湾曲した板状の鉄製品である。端部は折り曲げられており、これも刀または刀子の鞘の一部の可能性がある。

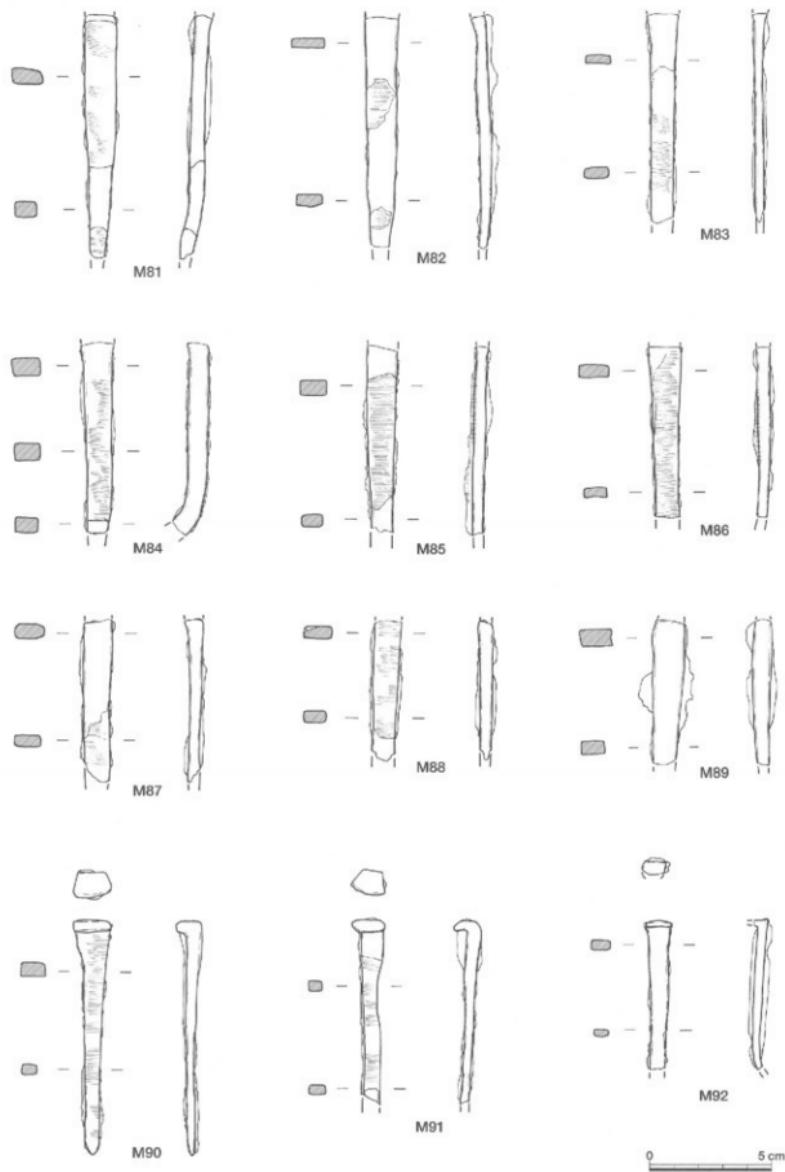


第19図 古墳出土鉄釘 (1) (1/2)

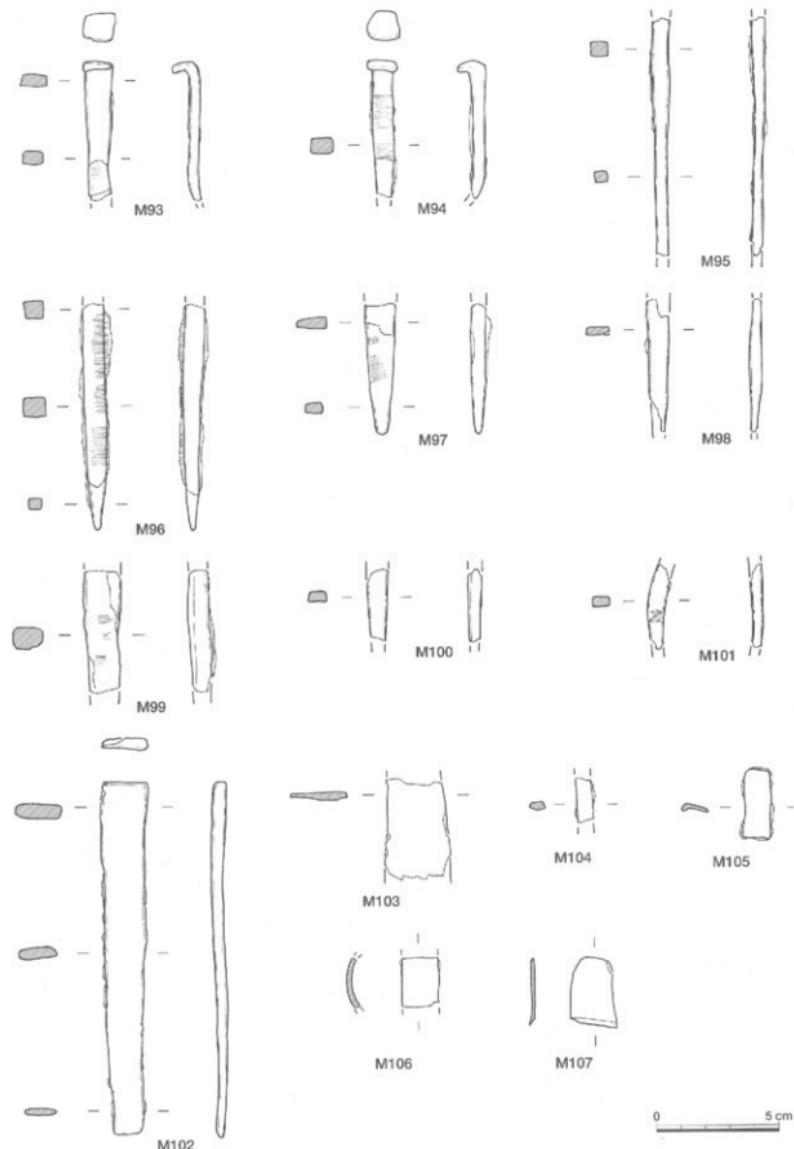
0 5 cm



第20図 古墳出土鉄釘 (2) (1/2)



第21図 古墳出土鉄釘 (3) (1/2)



第22図 古墳出土鉄釘・不明鉄器 (1/2)

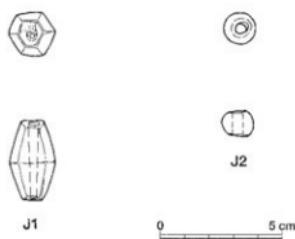
4 玉類

a 切子玉 (J1)

水晶製の切子玉である。石室の床面で検出された。全長32mm、最大径19mm、孔径(上)4mm、孔径(下)2mm、重量12.8gを測る。加工は6面に施されており、孔はほぼ中央より片側からあけられている。また、孔のすぐとなりには、穿孔時の失敗痕も認められた。

b ガラス玉 (J2)

ガラス製の玉である。石室の前方部より検出された。直径13mm、厚さ10.5mm、孔径5mm、重量2.1gを測る。濃い緑色をしている。



第23図 古墳出土玉類 (1/2)

5 鉄滓

東大谷1号墳では、石室の奥壁付近及び石室の前方部より10数点の鉄滓が出土している。最大のもので287.8gを測る。出土した鉄滓の総重量は、849.4gを測る。形状等から製錬滓と推定される。

第1表 土器観察表

番号	品名	器高 (cm)	口径 (cm)	口 徑 残存率	胎 上		外表面側	内面色調	焼成	備 考
					密	(0.5mm 大の黒点含む)				
1	伴鏡	3.80	11.95	100%	密	(~ 0.5mm 大の黒点含む)	N7/1灰白	SB7/1明青灰	良好	ロクロ 右 口縁部の一部に歪みあり
2	杯蓋	3.70	11.85	90%以上	密	(~ 0.5mm 大の黒点、白色砂粒含む)	S07/1明青灰	SB7/1明青灰	良好	ロクロ 右
3	杯蓋	3.15	11.00	64%	やや粗	(~ 0.5mm 大の白色砂粒、黒素母多く含む)	S7Y7/1灰白	S6Y6/1灰白	やや不良	ロクロ 右 天井部内面に不定方向仕上げナデあり
4	杯蓋	3.20	11.00	64%	やや粗	(~ 0.3mm 大の白色砂粒、右美多く含む)	2SY6/1黄灰	2SY7/1灰白	やや不良	ロクロ 右 天井部内面に不定方向仕上げナデあり
5	杯蓋	3.25	10.80	100%	やや粗	(~ 0.3mm 大の白色砂粒、石英多く含む)	2SY8/2灰白	S7Y7/1灰白	やや不良	ロクロ 右 天井部内面に不定方向仕上げナデあり
6	杯身	2.70	9.80	100%	密	(~ 2mm 大の白色砂粒少しある、~ 0.5mm 黒点多く含む)	S7Y7/1灰白	S7Y7/1灰白	良好	ロクロ 右 天井部からU線形にかけてゴマがかかる
7	伴鏡	2.40	9.30	90%以上	密	(~ 2mm 大の白色砂粒、黒点多く含む)	S7Y7/1灰白	S7Y7/1灰白	やや不良	ロクロ 右 天井部内面に不定方向仕上げナデあり
8	杯身	3.20	9.00	100%	密	(~ 0.5mm 大の白色砂粒少しある)	SFB6/1青灰	SFB5/1青灰	良好	ロクロ 右
9	鏡	10.70	8.80	100%	密	(~ 2mm 大の白色砂粒多く含む)	S6Y6/1灰	N5/1灰色	良好	ロクロ 右
10	鏡瓶	21.00	4.80	12.5%	密	(~ 1mm 大の白色砂粒多く含む)	N7/1灰白	N6/1灰色	良好	ロクロ 右
11	平瓶	16.60	6.90	33%	密	(~ 1mm 大の白色砂粒、黒点含む)	SB2/1青黒 (船の色)	SB34/1暗青灰	良好	ロクロ 右 全体に青黒色の斑がかかる。側部には垂直状が付着
12	平瓶	18.20	6.60	33%	密	(~ 0.5mm 大の長石、石英少し含む)	SY7/1灰白	SY7/1灰白	やや不良	ロクロ 右
13	平瓶	—	—	—	密	(~ 0.5mm 大の右美、石英少し含む)	S05/1青灰	S05/1青灰	良好	ロクロ 右
14	光頭鏡	—	8.00	30%	密	(~ 1mm 大の右美、長石、黒点少し含む)	S2Y7/3青黄	S2Y7/3青白	良好	—
15	光頭鏡	—	—	—	密	(~ 0.5mm 大の右美、長石、黒点少し含む)	N01/灰白	S2Y7/1灰白	良好	—
16	光頭鏡	—	—	—	密	(~ 0.5mm 大の白色砂粒少しある)	S05B3/1青灰	2SY1/青灰	良好	—

17	高杯	—	—	蜜 (~1mm 大の石英、無立少し含む)	10YR8/1 灰白	10Y8/1 灰白	良好	ロクロ 右 鞍部の一部のみ遺存
18	蜜	—	19.80	13%	蜜 (~1mm 大の白色砂粒少し含む)	5P2/1 青黒 (緑の色)	3H2/1 青品(蜜) 2.5Y8/2 灰白(ゴマ)	良好 蜜の表面全体に青黒色の粉がかかる
19	蜜	—	15.60	5%	蜜 (~0.5mm 大の白色砂粒少し含む)	6RR2/1 青黒	2.5Y8/2 灰白	良好 蜜の表面全体に青黒色の粉がかかる
20	蜜	—	—	やや蜜 (~1mm 大の白色砂粒多く含む)	5H5/1 青黒	SD4/1 青青灰	良好 蜜の表面全体に青黒色の粉がかかる	蜜は並行タキ、内面は中輪文で調整
21	蜜	5.40	9.40	100%	蜜良	2.5YR6/6 蜜	2.5YR6/6 蜜	良好 手捏ねにより蜜跡をつくりだす

第2表 刀子観察表

番号	遺構名	全長 (mm)	刃部長 (mm)	刃部幅 (mm)	刃部厚 (mm)	茎部長 (mm)	茎部幅 (mm)	茎部厚 (mm)	重量 (g)	備考			
										頭部	尾部	側面	() 内は推定、もしくは現存値
M12	石室床面	102.0	33.0	13.5	6.0	40.0	14.0	3.0	13.1	ほほ完全、頭部分に木質残る			
M13	石室床面	(79.5)	(42.5)	11.0	3.5	48.0	6.0	3.5	5.7	頭部は完全			
M14	石室床面	(47.5)	(47.5)	17.0	3.0				2.9	刃部のみ			
M15	石室床面	(44.0)	(44.0)	12.0	3.5				5.1	刃部のみ			
M16	石室床面	(46.5)	(46.5)	13.5	3.5				4.6	刃部のみ			
M17	石室床面	(47.0)	(40.0)	13.0	3.0	(7.0)	9.0	2.5	3.9	万能はほほ完全			
M18	石室床面	(48.0)	(38.0)	13.5	4.0	(10.0)	5.5	2.0	4.7	刃部はほほ完全			
M19	石室床面	(36.0)	(26.0)	11.5	3.0				1.7	刃部のみ			
M20	石室床面	(42.5)				(42.5)	9.0	3.5	3.2	頭部のみ、木質残る			
M21	石室床面	(32.0)				(32.0)	9.0	3.5	2.6	頭部のみ、木質残る			

第3表 鉄鎌観察表

番号	遺構名	形式	全長 (mm)	茎部長 (mm)	茎部幅 (mm)	茎部厚 (mm)	頭部長 (mm)	頭部幅 (mm)	頭部厚 (mm)	重量 (g)	備考			
											頭部	基部	側面	() 内は推定、もしくは現存値
M26	石室床面	半横・柳葉式	(102.5)	(51.0)	29.0	4.0	21.0	9.0	5.5	(30.5)	5.0	4.0	16.4	ほほ完全 (先端部欠損)
M27	石室床面	半横・柳葉式	12.0	48.0	(31.0)	3.0	22.0	6.0	3.5	51.0	11.5	3.5	13.7	ほほ完全 (先端部欠損)
M28	石室床面	半横・柳葉式	(96.0)	(52.0)	30.5	3.0	17.0	11.5	3.0	(25.0)	6.5	3.5	27.5	ほほ完全 (先端部欠損)
M29	石室床面	柳葉・柳葉式	17.0	17.0	9.5	2.5	12.0	5.5	3.0	36.0	4.0	3.0	10.7	柳葉付、完全
M30	石室床面	柳葉・柳葉式	145.0	21.0	11.5	2.5	76.0	5.0	2.0	48.0	3.0	2.0	6.5	柳葉付、先端、基部に木質残る
M31	石室床面	柳葉・柳葉式	172.0	28.5	9.5	2.5	81.0	4.0	2.0	22.5	4.0	2.0	5.0	柳葉付、ほほ完全 (基部欠損)
M32	石室床面	柳葉・柳葉式	(126.5)	(12.0)	9.0	1.5	114.5	6.0	4.5				8.0	ほほ完全
M33	石室床面	柳葉・柳葉式	(127.0)	15.5	9.0	2.0	112.0	5.0	3.5				5.8	ほほ完全
M34	石室床面	柳葉・柳葉式	(128.0)	(33.0)	12.0	2.0	87.0	6.0	3.5	(8.5)	2.0	0.8	9.8	柳葉付、ほほ完全
M35	石室床面	柳葉・柳葉式	(127.5)				(112.5)	8.0	4.0	(15.0)	5.0	3.0	10.9	柳葉付、頭部欠損
M36	石室床面	柳葉・柳葉式	119.0	28.0	10.5	2.0	63.0	4.0	2.5	28.0	3.0	2.0	5.6	柳葉付、ほほ完全 (基部欠損)
M37	石室床面	柳葉・柳葉式	(107.5)	27.0	10.5	1.5	60.0	4.5	1.5	(20.5)	2.5	2.0	4.0	柳葉付、完全
M38	石室床面	柳葉・柳葉式	(116.5)	22.0	10.0	1.5	63.5	5.5	2.5	(31.0)	5.0	2.5	4.1	柳葉付、ほほ完全
M39	石室床面	柳葉・柳葉式	(101.5)	11.5	9.5	2.5	65.0	4.5	2.5	(25.0)	4.0	3.0	3.7	柳葉付、ほほ完全 (基部欠損)
M40	石室床面	柳葉・柳葉式	(97.5)	20.0	5.0	2.0	77.5	5.0	2.0				3.2	柳葉付、茎部欠損
M41	石室床面	柳葉・柳葉式	(65.0)										2.3	茎部以下欠損
M42	石室床面	柳葉・柳葉式	(63.0)	29.5	13.0	2.5	(33.5)	5.0	2.0				2.9	茎部以下欠損
M43	石室床面	柳葉・柳葉式	(54.0)	22.5	10.5	4.0	(31.5)	5.5	4.0				5.2	茎部以下欠損
M44	石室床面	柳葉・柳葉式	(53.0)	40.0	11.0	6.0	(13.0)						4.2	茎部以下欠損
M45	石室床面	柳葉・柳葉式	(35.0)	23.0	9.0	2.0	(12.0)	4.5	1.5				1.8	茎部以下欠損
M46	石室床面	柳葉・柳葉式	(26.0)	16.5	9.5	1.5	(3.5)	6.0	1.5				1.1	茎部以下欠損
M47	石室床面	柳葉・柳葉式	(23.5)				(23.5)	15.0	3.0				2.1	柳葉のみ
M48	石室床面	柳葉・柳葉式	(97.5)				(97.5)	8.0	3.5				5.6	頭身・茎部欠損
M49	石室床面	柳葉・柳葉式	(79.0)	4.0	7.0	2.5	55.5	5.0	3.0	(19.5)	4.5	2.0	3.2	柳葉付、頭身、茎部欠損
M50	石室床面	柳葉・柳葉式	(60.5)	(4.0)	7.5	2.5	(56.0)	5.0	2.5				2.7	頭身・茎・頭部欠損
M51	石室床面	不明	(60.5)	(60.5)	6.0	3.0							7.8	頭身のみ
M52	石室床面	不明	(58.5)	(58.5)	6.0	4.0							5.8	頭身のみ
M53	石室床面	不明	(50.0)				(30.0)	7.0	3.0				3.4	頭身のみ
M54	石室床面	不明	(46.5)				(46.5)	7.0	4.0				3.2	頭身のみ
M55	石室床面	不明	(43.0)				(43.0)	5.0	2.5				1.5	頭身のみ

M56	右掌床面	不明	(39.0)		(29.0)	5.0	4.0			1.8 腹部のみ
M57	右掌床面	不明	(40.0)		(40.0)	4.5	3.0			1.7 腹部のみ、直角に曲がる
M58	右掌床面	稚板・柳条式	(37.0)		(9.0)	4.0	3.0	(28.0)	4.0	2.0 1.4 脊突付、麻痺・茎・頭部欠損
M59	右掌床面	不明	(33.5)		(33.5)	4.5	4.0			1.0 痢疾のみ
M60	右掌床面	不明	(31.0)		(31.0)	6.5	6.0			2.1 腹部のみ
M61	右掌床面	不明	(33.0)		(33.0)	4.0	3.0			1.6 腹部のみ
M62	右掌床面	不明	(28.0)		(28.0)	4.5	2.5			1.2 腹部のみ
M63	右掌床面	不明	(24.5)		(24.5)	3.0	2.5			0.5 腹部のみ、45度に曲がる
M64	右掌床面	不明	(25.0)		(25.0)	3.0	3.0			0.6 腹部のみ
M65	右掌床面	不明	(22.0)		(22.0)	4.5	1.5			0.1 痢疾のみ
M66	右掌床面	稚板・柳条式	(23.0)		(5.0)	4.5	2.0	(18.0)	4.0	2.0 0.6 脊突付、麻痺・手・頭部欠損
M67	右掌床面	不明	(24.5)		(24.5)	4.5	3.5			0.9 腹部のみ
M68	右掌床面	不明	(19.0)		(19.0)	4.0	3.0			0.5 腹部のみ

第4表 鉄釘觀察表

() 内は推定、もしくは既存値

番号	遺物名	全長 (mm)	頭部幅 (mm)	強部厚 (mm)	断面幅 (mm)	断面厚 (mm)	本質板 厚	重量 (g)	備考
M69	右掌床面	145.0	13.0	9.0	7.5	4.0	あり	16.8	完形
M70	右掌床面	137.5	12.0	8.0	8.0	5.0	あり	18.4	完形
M71	右掌床面	144.5	11.0	9.0	10.0	6.0	あり	22.4	完形
M72	右掌床面	140.0	11.5	8.0	9.0	6.0	あり	17.3	完形
M73	右掌床面	132.5	12.5	10.5	8.5	6.5	あり	17.3	完形
M74	右掌床面	126.0	10.0	7.0	7.0	4.5	なし	17.2	完形
M75	右掌床面	129.0	10.0	9.5	7.5	6.5	なし	13.7	完形
M76	右掌床面	122.0	13.0	12.5	8.5	5.5	あり	20.9	完形
M77	右掌床面	(124.0)	9.5	6.5	9.0	5.0	あり	13.3	先端部欠損
M78	右掌床面	(115.5)	11.0	12.0	10.5	7.5	あり	19.7	先端部欠損
M79	右掌床面	(123.0)			8.5	4.5	あり	13.7	頭部欠損
M80	右掌床面	87.0	13.0	7.5	12.5	5.5	あり	27.9	光沢、先端部曲がる、先端部に木栓の一部残る
M81	右掌床面	(100.0)	13.0	7.5	13.0	6.0	あり	26.9	先端部欠損
M82	右掌床面	(94.5)	15.0	6.0	13.0	4.0	あり	18.8	先端部欠損
M83	右掌床面	(86.0)	14.0	6.0	11.5	3.5	あり	15.1	先端部欠損
M84	右掌床面	(78.5)	14.0	12.5	12.0	7.0	あり	31.7	先端部欠損
M85	右掌床面	(77.0)	12.5	4.5	11.0	6.0	あり	17.6	先端部欠損
M86	右掌床面	(70.0)	14.0	4.5	12.0	5.0	あり	15.9	先端部欠損
M87	右掌床面	(67.0)	12.0	4.5	13.0	5.0	あり	11.6	先端部欠損
M88	右掌床面	(57.5)	12.0	7.0	12.0	6.0	あり	10.1	先端部欠損
M89	右掌床面	(59.5)	12.0	7.0	13.5	7.0	なし	18.5	先端部欠損
M90	右掌床面	(96.5)	15.5	10.5	16.0	6.0	あり	12.6	完形
M91	右掌床面	(76.0)	14.0	10.5	9.0	5.0	あり	8.1	先端部欠損
M92	右掌床面	(61.0)	9.5	4.0	8.0	4.0	なし	7.0	先端部欠損
M93	右掌床面	(57.0)	13.0	12.0	11.0	5.0	あり	9.3	先端部欠損
M94	右掌床面	(56.0)	13.0	12.0	9.0	6.5	あり	7.8	先端部欠損
M95	S-レシナ当	(97.0)			7.0	5.0	なし	8.2	身のみ
M96	右掌床面	(92.5)			9.5	8.0	あり	23.3	頭部欠損
M97	右掌床面	(59.0)			12.0	5.5	あり	9.5	頭部欠損
M98	右掌床面	(54.0)			9.5	5.0	なし	3.9	身のみ
M99	右掌床面	(50.0)			12.0	9.0	あり	17.4	身のみ
M100	右掌床面	(29.0)			7.5	4.0	なし	1.9	身のみ
M101	右掌床面	(34.0)			7.0	4.0	あり	2.6	身のみ

第4章 まとめ

調査の結果、東大谷1号墳は墳丘径11.4mを測る円墳であることが確認された。埋葬施設は、無袖と考えられる横穴式石室で、南方向に開口している。石室長4.45m以上（推定8m）、奥壁幅1.7m、石室高2.1mを測り、この地域では大形の部類にはいる。副葬品のなかでは、金銅装大刀金具と金銅装馬具が注目される。

以下では、東大谷1号墳の特色を整理し、その位置付けについて述べていきたい。

（立地）

立地は、稻木川によって形成された沖積地の北側、山王台地と呼ばれる標高約100mの丘陵の谷あいに位置する。この谷筋には、発掘調査は実施されていないが、権現平古墳（石室長7.9m、奥壁幅1.5m）、塚原3号墳（石室長8m、奥壁幅2.3m）など同規模の古墳が所在し、いずれも同じ立地で、南方向の谷がひらける沖積地に向けて開口している。いずれも市内では大形の横穴式石室であり、この地域の有力豪族の墓域と考えられる。

（墳形）

墳形は、周溝の内周で、直径11.4mを測る円墳であることが明らかになった。市内には、横穴式石室をもつ後期古墳が、78基確認されている（1）。破壊されているものが多く墳形がわかるものは少ないが、いずれも円墳であり、方墳など円墳以外の墳形は確認されていない。ちなみに、小田川流域で、円墳以外の横穴式石室をもつ古墳になると、吉備郡真備町二万の二万大塚古墳が前方後円墳、吉備郡真備町箭田の大塚古墳が造出付の円墳、小田郡矢掛町南山田の小迫大塚古墳の方墳が知られているのみである。いずれも備中地域を代表する古墳であり、大首長墓であったと考えられている。

（石室）

石室は、前方部が破壊されているため、規模は不明であるが、復元すると、全長は8mと推定される。石材は、大形で方形のものを側壁の最下段に使用しており、比較的整っている。第2段以上は徐々に石材が小さくなり、また、形も扁平なものになっている。各段の上面はほぼそろっている。奥壁は、天井に届く大きな三角形の石材を中心的に据えた特異な形状をしている。石室の形状から、6世紀末から7世紀前半期の様相を呈している。

本墳が、市内で初めて発掘調査を実施した後期古墳であるため、市内の他の古墳と比較をするのが困難であるが、市内に所在する規模のわかる56基の横穴式石室をもつ後期古墳で比較してみたい。奥壁の幅でみると、幅1.5m以下のものが38基を数え、総数の68%に近い。幅1.5m～2m以下の石室は、13基を数え、全体の23%を占め、本墳もこれに該当する。奥壁幅2mを超える石室は、5基を数え、全体の9%である。発掘調査を実施していない古墳の数値であるため一概に言いがたいが、奥壁幅1.7mを測る本墳は、やはり市域を代表する有力豪族の墓といえる。

（出土遺物）

出土した副葬品のなかで注目されるのが、金銅装大刀金具と金銅装馬具である。いずれも市内では初めての出土であり、被葬者の性格を考える上で貴重な資料となった。

金銅装大刀金具は、市内はもとより小田川流域においてもほとんど出土が確認されていない。足金

具は、単脚のもので、類例としては、岡山市竹原の根岸古墳出土の足金具（2）や上房郡北房町上中津井の定東塚・西塚古墳出土足金具（3）のものがあげられる。いずれも7世紀の初頭のものであるとしている。鞘尻は、袋状で、近隣では類例がみられない。

金銅装馬具は、小田川流域では、吉備郡真備町箭田の箭田大塚古墳（4）、吉備郡真備町二万（5）の二万大塚古墳で出土している。いずれも備中地域を代表する首長墓であるが、脚をもつ形状である。本墳出土の雲珠は、脚をもたない形式で、類例として絶社市三輪の三輪山6号墳（6）、苦田郡加茂町の万燈山古墳（7）があげられる。しかしながら、これらの雲珠は、装飾を施したり、宝珠をもつもので、時代も6世紀中葉から後葉の古墳である。本墳出土の雲珠は、形状も簡素で装飾、象嵌などもなく、7世紀にはいるものと考えられる。

出土点数の多いものでは、鉄釘がある。平根式と長頸式があり、平根式は、柳葉式と方頭式が出土している。長頸式は、全て柳葉式で、鍵身間に段を持つものと持たないものがある。平根式と長頸式では、平根式が3点、長頸式が19点と圧倒的に長頸式が多い。県南西部では、平根式の数が多くなることが特徴とされており（8）、本墳は例外となり、どちらかというと畿内である（9）。

鉄釘は、頭部の形状で大きく3つに分類できる。

A類 頭部が丸く膨らみ断面も正方形に近く、全長が12~14cm。

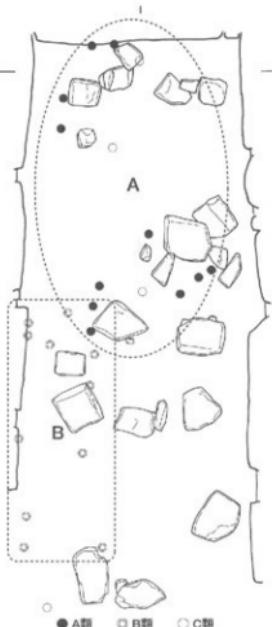
B類 頭部が直線的に処理され、断面は扁平か長方形。全長が10cm以下。

C類 頭部を直角に折り曲げ、断面は扁平か長方形。全長が10cm以下。

それぞれの検出状況をみてみると、A類については、石室奥壁近く及び中央部分から検出されている。この近くには、元位置を保っていると思われる大小の鉄刀や雲珠があり、A類の木棺の被葬者の副葬品の可能性がある。B類については、石室中央の西壁付近から検出された。検出状況から、木棺の位置・大きさ（180cm×30cm）がほぼ復元できる。C類については、石室全体に散在し、数量的にも、他の2類と比べると少ない。

以上のように頭部の形状と出土状況から判断すると、東大谷1号墳は、少なくとも3回以上の埋葬が考えられる。まず、A類の鉄釘を使用した木棺が奥壁近くのはば中央部に納められ、続いて、B類の鉄釘を使用した木棺が、石室中央の西壁に沿って収められる。その後、C類の鉄釘を使用した木棺が納められた可能性がある。

A類・B類の鉄釘は、赤磐郡山陽町河本の岩田8号墳（10）や前述の根岸古墳（2）出土の鉄釘と形状が似ている。時代は、6世紀後葉～末葉となっている。C類の鉄釘は、7世紀以降の古墳に広く用いられたもので、上房郡北房町上中津井の定北古墳（11）や前述の定東塚・西塚古墳など7世紀中葉の古墳でも多く出土している。鉄釘からみると、6世紀後葉に埋葬が始まった可能性があり、7世紀中葉まで追葬されて



第24図 鉄釘出土状況（1/40）

いたことが考えられる。

また、須恵器であるが、杯蓋が、口径が118~119mmと、かえりとつまみの付いた口径93~110mmの2つのタイプが確認されている。前者は、大阪府陶邑TK209式（12）と併行し、7世紀初頭が当てる。後者は、同じくTK217式（12）と併行し、7世紀中葉が当たっている。

最後に、石室内より鉄滓が出土している。鉄滓を伴う古墳は、吉備地方に多くみられ、本墳も例外ではない。本墳の近隣には、南へ約5kmの笠岡市東大戸に鉄塊遺跡（13）が所在する。出土した須恵器より、本墳と同時代と考えられている。また、市内にも同時代と考えられる製鉄遺跡が鉄塊遺跡の北1kmに所在する。のことから、近隣で鉄滓入手することは容易であったといえ、本墳の被葬者は、鉄を生産する集団と何らかの関わりがあった可能性がある。

（まとめ）

以上のことから、東大谷1号墳の時代とその被葬者について述べてみたい。

まず、東大谷1号墳の年代であるが、出土した須恵器や石室の形状などから、6世紀末から7世紀初頭が考えられ、中葉まで追葬が2回以上おこなわれたようである。しかしながら、鉄釘の形状から、6世紀後葉の様相をもつものもあり、6世紀後葉に最初の埋葬がおこなわれた可能性もある。

また、被葬者であるが、金銅装大刀金具と金銅装馬具をもつことから、大和朝廷または吉備の中核と何らかのつながりをもったこの地域の権力者であったことが想像できる。また、鉄滓の出土や豊富な鉄製品などから製鉄集団と何らかの関わりがあったことも推測される。

註

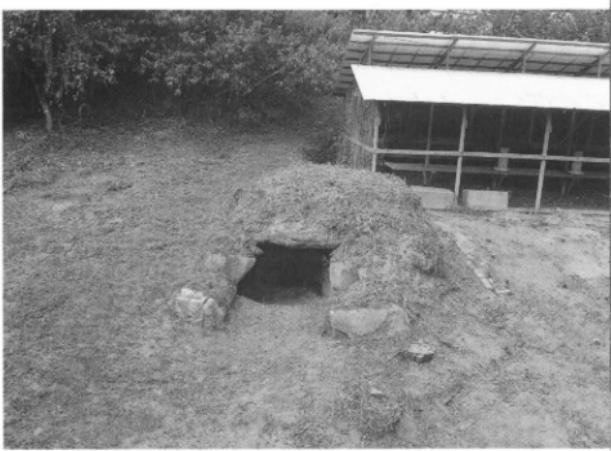
- (1) 井原市教育委員会編『井原市遺跡地図』井原市教育委員会 2000
- (2) 内藤善史・岡本寛久・宇垣匡雅『高下遺跡・浅川古墳群ほか・橋原古墳群・根岸古墳』岡山県古代吉備文化財センター 1998
- (3) 新納 泉・光本 順『定東塚・西塚古墳』北房町教育委員会 2001
- (4) 岡山県史編纂委員会『岡山県史 第2巻 原始・古代I』山陽新聞社 1991
- (5) 2003年に岡山大学考古学研究室による第3次発掘調査で出土した。
- (6) 西川 宏『備中三輪山六号墳』『古代吉備』第5集 1963
- (7) 渡辺健治・今井 兑『万燈山古墳』1974
- (8) 尾上元規『古墳時代後期における鐵鐵の地域性の形成について』『古代吉備』 1995
- (9) 尾上元規氏の教示による。
- (10) 神原英朗『岩田古墳群』 1976
- (11) 新納 泉・尾上元規『定北古墳』 北房町教育委員会 1995
- (12) 田辺昭三『陶邑古窯址群I』 平安学園考古学クラブ 1995
- (13) 1993年に笠岡市教育委員会によって発掘調査がおこなわれた。

報告書抄録

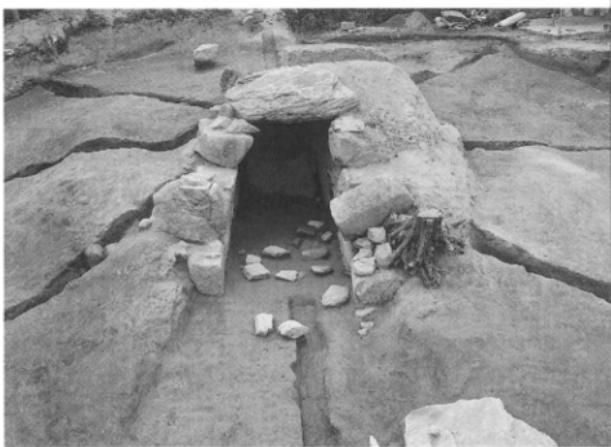
ふりがな	ひがしおおたにいちごうふん
書名	東大谷1号墳
副書名	消防庁舎移転事業に伴う発掘調査
卷次	
シリーズ名	井原市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	1
編著者名	高田知樹
編集機関	井原市教育委員会
所在地	〒715-8601 岡山県井原市井原町311-1 TEL 0866-62-9533
発行機関	井原市教育委員会
所在地	〒715-8601 岡山県井原市井原町311-1 TEL 0866-62-9533
発行年月日	2003年3月31日

ふりがな 収載遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしおおたにいちごうふん 東大谷1号墳	おかやまけんいばらし 岡山県井原市 なぬかいちょうひがしおおたに 七日市町東大谷 3214		33206	14°-33'	34° 35° 08"	133° 28' 38"	19980729 19981112	300m ² 消防庁舎 移転事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
東大谷 1号墳	古墳	古墳時代	横穴式石室1基	須恵器・土師器・刀・ 鎌・耳環・釘・馬具・ 金銅装大刀金具	古墳時代末期の 大型石室古墳			

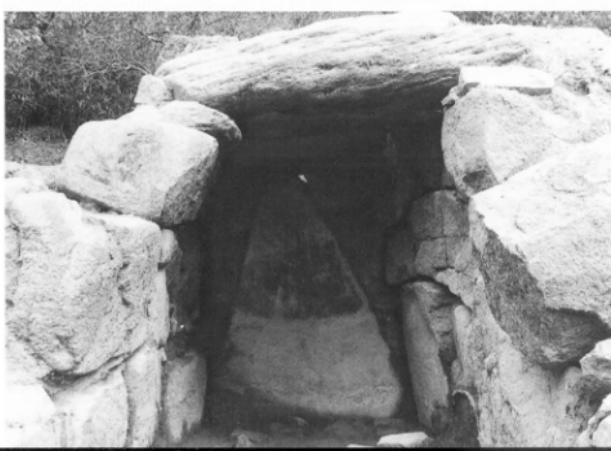
1 調査前古墳全景（南から）



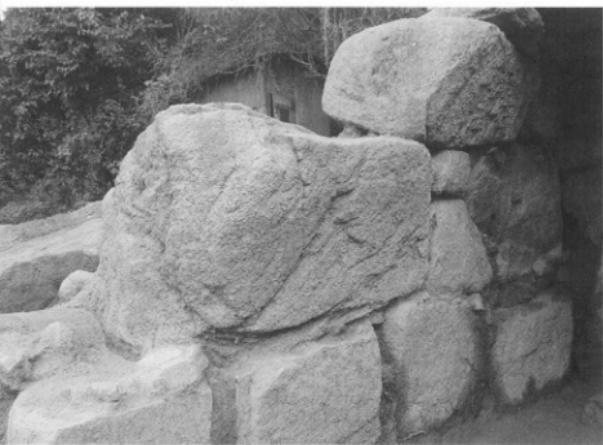
2 古墳全景（南から）



3 石室奥壁（南から）



図版 2



1 石室西側壁（南東から）



2 石室東側壁（南西から）

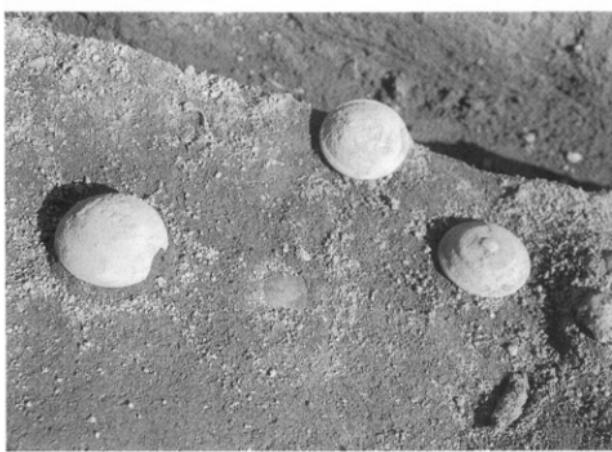


3 墳丘東トレンチ土層断面（北東から）

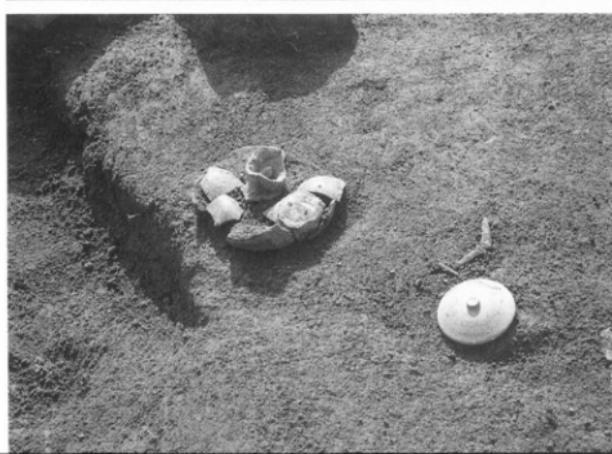
1 石室前須恵器出土状況（東から）



2 石室前須恵器出土状況（西から）



3 石室前遺物出土状況（北東から）



図版 4



1 石室内鉄刀出土状況（東から）



2 石室内雲珠出土状況（南から）



3 石室内鞘尻出土状況（南西から）



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



15



18



11



12

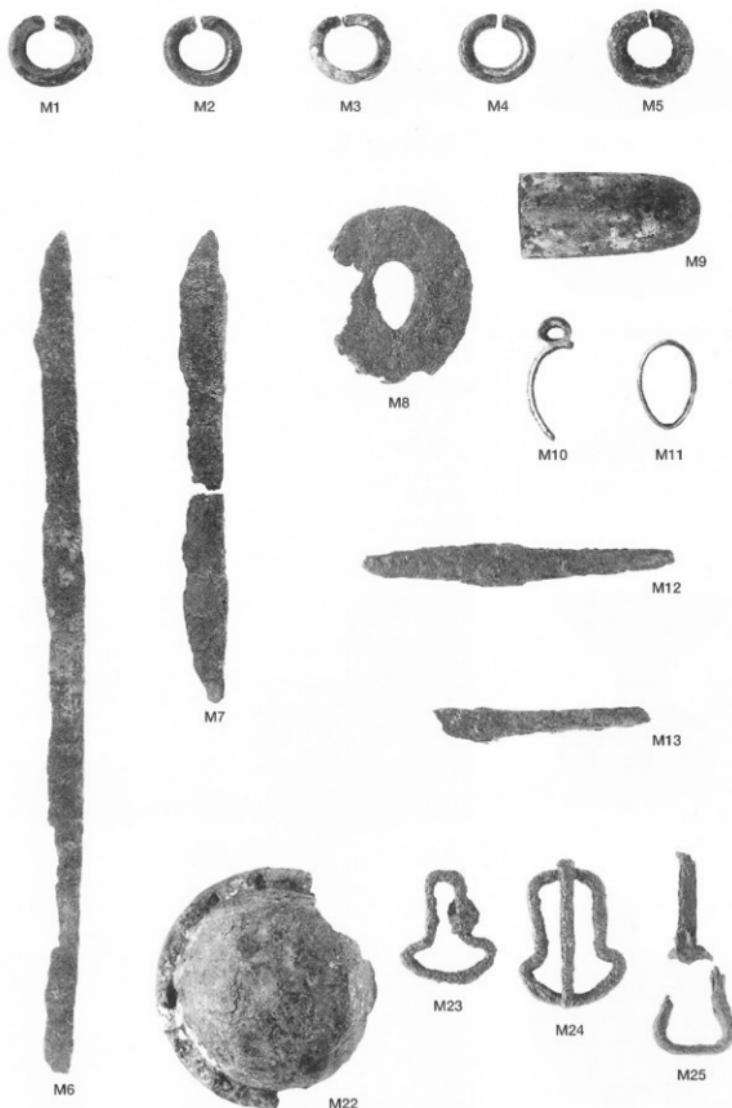


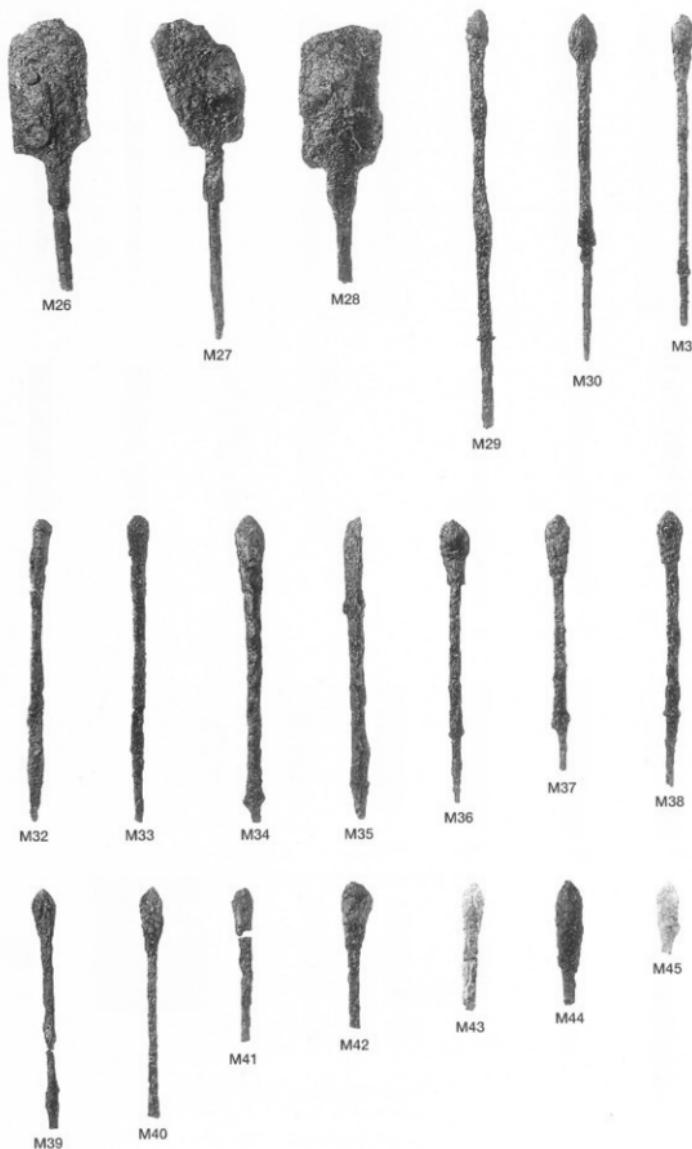
19



21

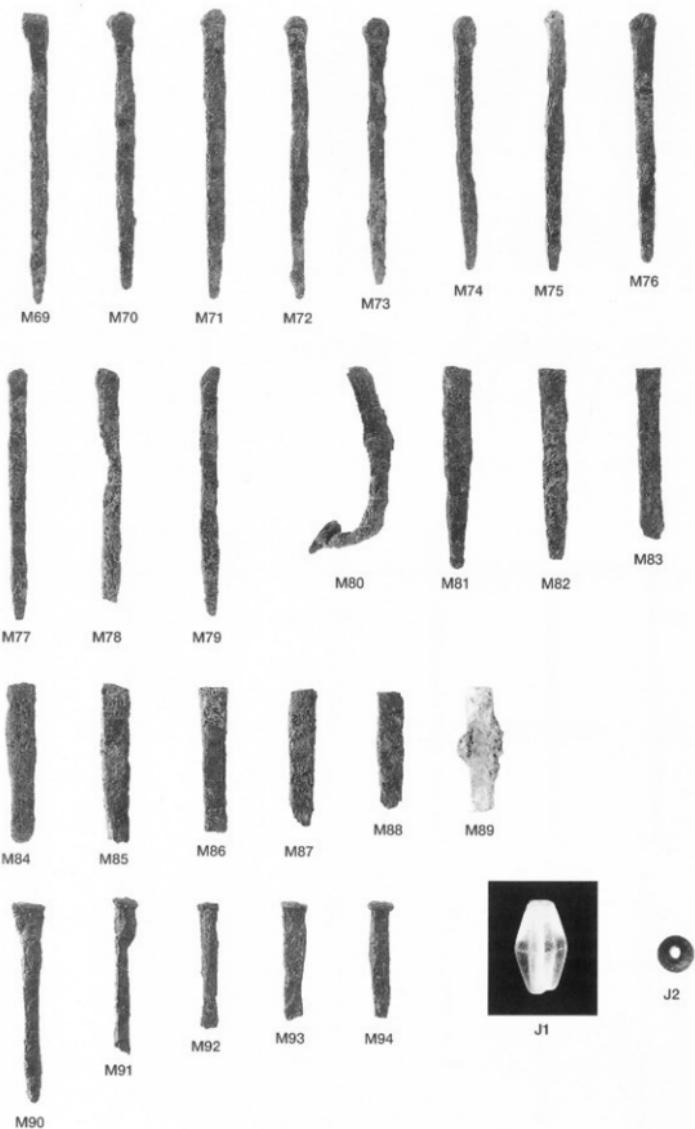
1 古墳出土土器





1 古墳出土鉄鎌

図版 8



1 古墳出土鉄釘・玉類

井原市埋蔵文化財発掘調査報告1

東大谷1号墳

消防庁舎移転事業に伴う発掘調査

2003年3月27日 印刷

2003年3月31日 発行

編集・発行 井原市教育委員会
岡山県井原市井原町311-1
印 刷 西尾総合印刷株式会社

